
ファーランドの聖女

小田マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストランドの聖女

【Nコード】

N7737T

【作者名】

小田マキ

【あらすじ】

水源豊かな小国フリーダイルの第一王女アマリットは呪われている。そんな忌まわしい噂のある彼女が妻に望まれ、嫁いだのは、渴水に悩む砂漠の国ヴェンダント……すでに王妃も王太子もいるサージ王だった。

エリアスルート地形図（作：鈴木弥生様）

> i 2 6 8 2 3 | 9 6 9 <

例によって例の如く、鈴木弥生様より、『ファールランドの聖女』用のエリアスルート地形図を作って頂きました！ いつも本当にありがとうございます！！

同じ世界観である『蒼穹の孤独』、『死神と姫君』、『not found』、『アイリスの剣』、『ファールランドの聖女』内できてきている（今後、出てくる予定含む）国名だけを記載しています。

この先、国、島などが増えたり減ったりする可能性があります。

各作品中の記載と極力矛盾なく作って頂いたつもりですが、おかしな点がありましたら、お知らせ頂けると有り難いです。

呪われし王女

「輿入れ先が決まりましたよ、アムリット姉上」

蜂蜜色の髪に、晴天を思わせる紺碧の瞳を持った美しい少年は、ジメジメした薄暗い部屋の一点を見つめながらそう言った。

そこは風変わりで陰気な場所だった。調度品は何もない、殺風景な部屋……相当に湿度が高いようで、室内だというのに、辺りには濃い霧が立ち込めている。その場に立っただけでも着ている服は、空気中の水分を吸ってジットリと重たくなった。少年の長い金色の睫毛も、瞬きをする度にそこに溜まった水が弾かれ、霧の中でキラキラと輝いていた。

「フリツカー……冗談でしょ？」

そんな彼の湿った視線の先、壁際の床の上に転がった灰色の塊が返事を返す。そのまま立ち上がったために、生き物だったということが知れた……それが、少年フリツカーの言う「アムリット姉上」らしい。

頭のとっぺんから爪先まで、長方形の紙切れが幾重にも貼りつけられていて、身じろぐ度にザワザワと揺れている。手足の所在も不明の姿は、まるで寒さ厳しい冬を越すために枯れ葉を我が身に貼りつけ、防寒具とする虫のようだ。ただ、貼りつけてある紙は特殊なものらしく、この湿気の中にもまったく濡れたり、剥がれたりする

様子は見られなかった。眼を凝らすと、一枚一枚の表面には、ひとつづきの途切れることのない黒い線が、何か文様のようなものを描いているのが分かる。

「こんなナメクジ女、一体どこの誰が嫁にするって言うのよ」

フリツカーのちょうど目線くらいの位置に貼りつけられた紙がザワリザワリと揺れ動いたことから、そこが口にあたる部分らしい。アムリット……自称・ナメクジ女の身長は、十二歳の自称・弟フリツカーより頭半分高く、年齢は定かではないが、女性としたら高すぎず、低すぎずな部類。紙の下で多少こもった声音は、随分とやさぐれて無気力で、異様な外見に似つかわしかった。

「なに言ってるんですか、ナメクジ女だからですよ！ 姉上のジツトジツとした鬱陶しい力が、やっと人の役に立つときがきたんです！」

そんな彼女に対して怖じもせず、フリツカーは薔薇の蕾のような愛らしい唇で、力強く……相当な暴言を吐いた。

「……………なっ……………、どーゆーこと？」

正面切って投げつけられた、その愛くるしい微笑みとは裏腹の毒……さすがに面食らったようで、アムリットの身体は大きくうしろに傾いだ。全身に貼りついた紙がザワザワと、暴風雨にさらされた木の葉のような少々騒がしい音を立てた。

「熱晶国ヴェンダントで、聖なる泉ファアランドが干上がってしまつたんです。その他のオアシスもぞくぞく砂に埋もれて………今、あそこは生活水にもこと欠いているんですよ。その現状に心を痛めたサージ国王が、一体誰を思い出したと思いますか？」

まるで物語を話すような語り口で言ったあと、フリッカーはキラキラ輝く双眸を姉に注ぐ。それは、睫毛に溜まった水分のせいだけでなかった。期待と興奮が入り混じり、活き活きとした瞳は、彼をさらに愛らしく見せている。

「……いや、……知りたくもないんだけど」

しかし、返すアムリットの言葉はにべもない……二人の間には、かなりの温度差があった。

「そうですねっ、フリーダイルの呪われし王女、彼のナメクジ女っ……姉上です!」

「だから、別に知りたくないって……っーか、連呼しないで。自分が言うのはいいけど、人に言われると結構傷つく……」

「ナメクジ女を国に招けば、泉もきつと蘇るはずなんだそうですねっ! 水源豊富なフリーダイルでは行く先々で湿気と不快感をもたらすだけの姉上も、ヴェンダントへ行けば聖女ですよ。ナメクジ女が聖女になれるんですっ……ヴェンダントは砂漠の国ながら大国ですし、縁続きになれば、小国フリーダイル始まって以来の快挙ですよ!」

「……あんだ、絶対わざとでしょ」

目の前で身ぶり手ぶり交えて力説する彼に対し、アムリットは力なく言った。口もとの紙が小さく揺れる……ため息をついたらしい。

「ヴェンダントに行ってもいいけど、別に結婚する必要ないでしょ。」

サクツと泉湧かして、帰ってくればいいんだから」

「駄目です！ また枯れたらどうするんですっ……砂漠の水がどれだけ貴重か、姉上はぜんぜん分かってない！」

あなたは、姉の気持ちをぜんぜん分かってない……己に向かって、ビシツと人差し指を突き立てるようにして言い切ったフリッカーに、アムリットの口もとの紙が再びサワサワと揺れた。

「身一つで来てくれて構わないとのことでしたから、明日には出発してもらいますからね。湯水で焦ってるんでしょ、きつと……父上も母上も大喜びですよ、泣き笑いですよ」

「……あつそ、よかつたわね」

さらに他意なくとどめを刺す弟に、アムリットの逆らう気力はもはやなくなっただらしい。

「……まーいいけどね、砂漠だろうが何だろうが、あたしがいたら湿っぽいのは同じだし。でも、国のためとはいえ、ヴェンダント国王もよくもあたしなんか王妃に……」

とはいえ、少し気になったことを舌に乗せると……。

「違いますよ、姉上。王妃様はちゃんと別にいらっしやいますし、王太子様も昨年お生まれになっています」

「はっ………？」

当然だ、というように返された言葉に、アムリットの思考が止ま

る。

「あそこの国は、エリアスルートでも変わった風習があつて、王族は十人まで妻を持てるんだそうです」

さすがは砂漠の国、体力ありますよね……そう続けたフリッカーに対して、アムリットは固まったまま、何の返事も返せなかった。

「そんなどうでもいいことより、ちゃんと地下水湧かしてサージ王を喜ばせて下さいね、聖女様！フリーダイルの命運が懸かってるんですから！じゃっ、僕はこれで」

あー暑苦しかった……と、湿った上着を脱ぎながら、言いたいことだけ言つて、豆台風のような弟は去つていった。

「……それって、いよいよ結婚する意味あんの？」

一人取り残されたナメクジ女は、しばらくしてから、そう複雑な思いで呟いていた……。

王族の証である純白の長衣に身を包んだ熱晶国ヴェンダント王サージ・ケイラー・メヌーク三世は、大理石に敷かれた羅紗の絨毯の上に、片膝を立てて座していた。

暑い……汗一つかかず、涼しげなその様相とは裏腹に、内心ではうだるような暑さに辟易していた。

砂漠の国ヴェンダントは、常夏の国である。

しかしながら、ここ最近の暑さは異常だった。通常ならば数ヶ月前に来ているはずの雨季が、今年はいまだ訪れてないのだ。そのせいで井戸は枯れ、潤沢だった泉は干上がっている。エリアスルートで五本の指に入る大国は今、生活水にもこと欠いていた。

それゆえに、長老達が下した決断は、驚くべきものだった。

フリーダイルの第一王女アマリットを、国王の第二妃に迎える。

取るに足らない片田舎の小国の、今年で二十八になる嫁ぎ遅れも甚だしい女……すでに王妃も王太子もいる国王サージが彼女を受け入れるには、やむにやまれぬ事情がある。

フリーダイル王女には、忌わしい噂があった。

アマリットは呪いを受けている。それは、魔障壁を張った塔の中で、呪禁符で全身を覆っておかなければ、一都市が水没してしまうほどの強力な「水呪^{すいじゆ}」だ。実際、二十年前にフリーダイルでは小さ

な村が水没しており、王女の仕業だといわれている。

初めのうちは、安直すぎる。そんな忌わしい娘を誇り高きヴェンダントに招き入れるなどもってのほか、と反対意見のほうが高かった。それでも、一ヶ月、二ヶ月と雨一滴降らぬ日が続き、拳句の果てには王族の管理する聖泉ファールランドまでも干上がったことを受け、反意の声は聞こえなくなった。

幾多の対策を打ち出し、ことごとく失策した今、国王といえど、自分にそのことに否を唱える権利はない。

よくよく考えてみれば、二十八年間、せいぜい三級止まりのろくな魔術師のいない小国が彼の村以上に水没せずにすんでいることを考えれば、そこまで御しがたい呪いではないのだろう。「水呪」もうまく使えば、ヴェンダントの恵みの雨となってくれよう……そんな希望的観測を抱くだけだ。

「……遅うございますね、我が君」

自身が辛うじてかみ殺したため息を我慢せずにやってのけ、さらに不満げな声を上げた傍らの存在に、サージは目をやる。

豊かな暗緑色の髪と双眸を持った美女は、第一妃のダラシアだ。チャルタと呼ばれる細かな刺繍の施されたシヨールで全身をすっぽりと覆っているが、半透明な黒のそれはヴェンダントの民特有の琥珀色の肌を透かし、雌豹のごとき肉感的な肢体の輪郭をしっかりと浮かび上がらせている。目の保養と言ってしまうえばそれまでだが、隠したいのか、晒したいのか、一体どちらなのか。座蒲の上に投げ出された煽情的なその姿が、自分の目にも相変わらず美しく映ることは確かだったが。

「王女に拒否権はない、もうじきやってくるでしょう……あ」

「サージっ……いつまで、わたくしをそのように呼ぶつもりです！」

無意識に出かかった己の呼びかけを遮り、眉を逆立てた彼女に、サージは曖昧に笑う。

「いつになってもこればかりは慣れるわけがない。貴女はつい二年前まで……」

「サージ様っ、見えられましたぞ！」

王と王妃の間に剣呑な気配が漂い始めたとき、部屋の中に第三者の音が響いた。扉のない入り口にかけられた御簾をかき分けて現れたのは、緋色の長衣をまとった総髪の老人……此度の婚姻を取り決めた長老ホレストルである。

「さて……お待ちかねのフリーダイルの聖女の到着です、ともに出迎えましょうか」

即座に立ち上がり、手を差し出したサージに対し、ダラシアは挑むような視線を送るだけで、その手を取るうとも、立ち上がるうともしない。

「貴女も納得したはずだ」

頑なな彼女に、サージのかける声に苛立ちが滲んだ。

「サージ様っ、今は言い争っている場合ではありませんまい。貴方様だけでよろしい、王妃様はいずれ日を改めて」

責める言葉を奪われて、サージは再び皮肉ったような笑みを口もとに刻む。誰も彼も、庇い立てるのは王妃だ……一国の頂点に立つただ一人は、この自分だというのに。

「さあっ、お急ぎ下さい、王よ！」

「分かっている」

踵を返した背に突き刺さるダラシアの視線を感じながら、サージは王の間を後にした。

* * *

国土の大半が砂地である彼の地での移動手段は馬車ではなく、リヤントという馬によく似た首の長い動物だ。前脚と後ろ脚を片側ずつ交互に蹴り出して器用に進むその動物は、足は速いが、乗り心地

は最悪だった。砂地を飛ぶように進むので、酷く揺れる。特産物である特殊な革で作られた鞍が大半の衝撃を吸いとってくれていたが、それでも慣れない異国の者には拷問のような時間だった。

暑い……ようやく目的地前に降り立ったアムリットは、小さく呟いた。

大地はサラサラと柔らかく崩れ、足首までまとわりついて熱を上げる。まるで火の上を歩いているようだ。粗相があってはならないと、いつも以上に魔術師が神代の言葉をしたためたまじない札を体中にまとい、その上から日よけの分厚いシヨールをまとった自分は、いつ発火してもおかしくない。実際、呪禁符に覆われて見えない指先からは、薄く陽炎が立つように白い靄が立ち昇っている。

そんな自分を無遠慮に突き刺してくる城の衛兵達の視線が、さらに不快感を煽る。

白日の下に晒された異様な姿は、免疫のない異国の人々にはさぞ気味悪く見えることだろう。そんなことは承知の上でここまで来たけれど、だからといって傷つかないかという点、それはまた別の話だ。

熱気に揺らぐ視線の向こうには、ヴェンダント人の肌と同じ琥珀色に輝く荘厳な城がそびえ立っている。滑らかな曲線の美しい丸い屋根を持つその建物は、今までに一度も目にしたことのないものだ。エリアスルート内でも独自の文化を誇るヴェンダントでは、一般的な建築様式なのだろうか……。

「……溶ける」

そんな風に考えて意識をよそに持っていていこうとしても、己の口がそれを裏切る。我が身にまわりついていいる「水呪」さえ蒸発しそうな暑さに、完全に参っていた。ずっとフリーダイルの城の離れの塔の一室にこもりつきりだったアムリットにとって、このような長旅も火で直接炙られるような暑さも初めての経験なのだ。リヤントの揺れにも酔ってしまい、ことさらに体力を奪われた。

「妙な動きはせず、ここで待つように」

傍らに立つヴェンダント人の男が、呪禁符をカサカサいわせながら眩暈を覚えて左右に傾いでいた自分に、なかば叱責するような口調で言った……傍目には、怪しげな動作で呪いを振りまいているように見えたのかも知れない。

国境からヴェンダントの王城デイル・マースまで案内を務めてくれた城の近衛隊長は、確か名乗っていたとは思いが、はっきりとは覚えていない。リヤントの上での自己紹介は舌を噛まないようにするのが精いっぱい、相手の言っていることにそこまでの注意を払えなかった。皆が触れるのも嫌がる自分を……まあ、仕方なくだろ。うが相乗りして運んできてくれたことは、感謝するし、勇敢だといってもいい。

けれど、皮肉なことに、そのせいでアムリットの体力は余計に削られてしまった。慣れない動物の背に乗った移動もそうだが、呪禁符越しにも身体を密着せざるを得なかったことで、「水呪」の力を抑えることに必死だった。その気になれば、人一人なぞ空気を奪って簡単に溺死させられる……いまだ実行に移したことはないのだけだ。

魔術師達の診立てによると、アムリット自身にはあらゆる水の害

に対して耐性があるらしい。蛇が己の毒では死なないのと同じ理屈だという……それならば、と自力で彼女は「水呪」を最小限に留める術を身につけていた。術といっても、単に精神力なのだが。それでも、幼い頃はわけも分からず、フリーダイル国内に大小様々な水害を発生させていたが、今では一つの村を湖に変えてしまうようなことはなかった。

住んでいる塔の中の自室が湿気で蒸し風呂のようになっていたり、かびだらけになったりする程度である。両親や弟からも、呪いはときが経つにつれ自然と薄れただけで、ただ食っちゃ寝しているように思われている彼女は、見えないところでちゃんと努力をしていた……「呪われているなりに、頑張ってます」と自己主張するのも馬鹿馬鹿しいし、それで扱いが変わるわけでもないだろうから黙っているだけだ。

「……………何か？」

自分の努力も知らないで……面白くない思いで野性味溢れる強面を見つめていたら、まじない札の下の視線に気付かれました。うだ。切れ長の目が、チロリと自分に向けられる。

年は自分とそう変わらないだろうに、近衛隊長に上りつめただけあってその眼光は至極鋭い。筋肉質な体つきも褐色の肌と相まって、まるで黒豹のようだ。罪人でも見るような視線は不愉快だが、不当な扱いを馬鹿正直に理不尽だと訴えるほど、アムリットも無鉄砲ではなかった。そんなことをすればフリーダイルがどんな責めを負わされ、両親と弟に何を言われるか分からない。

ヴェンダントの民といえば、海軍で有名な海港国リゾナと祖先は同じ種族だったらしい。かつてはエリアスルートの海を支配してい

た海賊で、何かしら争いがあって二部族に分かれたあと、同じような時期に海を捨て、地上にそれぞれリゾナとヴェンダントを建国したという逸話がある。海賊を祖先に持つ彼らは気性が荒く、排他的だと聞いていたが、その噂は本当だったようだ。

「もうじき王が出迎えに来られる……くれぐれも不敬な真似はしないように」

仮にも、その王の第二夫人になるだろう人間に向かって、お前はなんなんだ……眼光を緩めず言った近衛隊長に、いくら虐げられることに慣れているアムリットでも、不快感を覚えた。

こんな身の上なので、嫌悪感や鬼胎の念のこもった視線を向けられることは日常茶飯事だ。自国ではナメクジ女とか、ジトジト王女とか呼ばれているし、齡二十八歳、最初の十年間で、人間らしい扱いなぞ諦めている。

ただ、ここまで敵意むき出しにされるのは初めての経験だった。

「水呪」の娘と係わり合いになりたくない気持ちは、百歩譲って理解しよう……しかしながら、こちらは拒否権なしで無理矢理呼びつけられているのだ。今回ばかりは、もともと後ろ向き全開の自分でも、まったく非はないと断言できる。やおら込み上げる怒りに呼応するかのように、呪禁符が耳障りなザワザワという音を立て始めた。

ちょっとくらいなら、ヤキ入れてやってもいいんじゃない？

ひれ伏せ、無礼者。

腹を決めたアムリットは、砂地の上にペタンと座り込んだ。

「お前つ、何をするつもりだっ………！」

お前つて、いくらなんでも失礼すぎるでしょーが……腰に帯びた剣に手をかけ、自分の一挙手一投足に過剰なくらいに警戒心を露にする近衛隊長に、アムリットは呪禁符の下で失笑する。

そして、次の瞬間、彼女の身体に異変が起こった。

ハラハラと木の葉が散るように、全身を覆っていたまじない札が一斉に剥がれ落ち、その下からは白い靄が立ち昇る。

「ひっ………！」

近衛隊長の口から漏れた悲鳴に近い声に、この国にやって来てからずっとアムリットの心を煩わせていた不快感は、呪いを封じる最後の一枚とともに剥がれ落ちた。

「ヴェンダントの皆様へ、フリーダイルから心ばかりの贈り物です」

立ち昇る大量の水蒸気の中から、取り澄ました声を吐き出したあと、彼女を形作っていた黒いシヨールが散乱した呪禁符の上に、クシヤリと潰れる。

「……っ、どこに行っ たっ……？」

それは、まるで塩をかけられたナメクジのように……近衛隊長や衛兵達が見守る目の前で、アムリットは忽然と姿を消した……。

* * *

廊下を進めば、両端に居並ぶ衛兵達が膝を折る。一糸乱れぬその様には、心が通っていた……けれど、サージが覚えるのは満足感ではなかった。彼らの敬意の対象は、王である自分ではなく、ともにいる長老ホレストルなのだ。彼がいなければ、最敬礼なぞされない。

血塗られた海賊稼業から脱し、陸の民となつてから気の遠くなるほどのときが経った今も、ヴェンダントは弱肉強食の理念が拭えずにいる。王の前を進む、若かりし頃は勇猛果敢な戦士であったホレ

ストールと、義務だけ押しつけられて何の権威もない我が身がその証だ。

父や義兄弟達のように武芸に秀でていれば、形ばかりの敬礼を向けられることはなかったのだろうか……否、魔導の力を持って生まれた時点で、自分は見限られていたのだ。かつての同胞リゾナほどに苛烈なものではないが、この国ヴェンダントにも魔術師への偏見がある。希少な神の恩恵は、ここでは枷にしかならなかった。

……何だ？

己の不甲斐なさを内心嘲笑っていたところ、不可解な感覚に支配され、サージは足を止める。体表を舐めるような空気の振動に上げた視線は、早足で少し先に行くホレストルと相変わらず頭を垂れたままの衛兵達の姿を映すだけ……彼らのうち誰一人として、今自分が覚えた異変を感じとっている様子は見られなかった。

「サージ様？ 今さら、貴方様までっ……」

「違う……お前は気付かんだろうな、これは」

途絶えた己の足音に、苦言を呈そうと振り返ったホレストルを、手を上げて制する。そうこうしているうちにも、目に見えない波動のようなものが、我が身を駆け抜けていく……今、この場において

己しか感知できない予兆がなにものであるかは、考えるまでもなかった。

「サージ様っ……っ?」

驚愕の混ざった呼号を上げる長老を押しつけ、サージは駆け出した。

突発的な疾走にガトラがあおられ、それを留める金の頭冠が外れる。ヴェンダントの王の証は床を転がり、甲高い音を立てて、ホルストルのさらなる怒声を誘発した。それでも、彼は足を止めることをしなかった。

そのままの勢いで城門を越えた先に見えてきたのは、フリーダイル王女を迎えるはずの場所……いまだかつて体感したこともないほどの魔導の力の源は、やはりそこだった。門番の衛兵達が、持ち場を離れて小さな人ばかりを作っている。

「何をしているっ……っ!」

「我が君っ?」

息が上がったまま、投げた声に振り返ったのは近衛隊長のエイダンだ。彼の常にない取り乱しように、胸騒ぎを覚える……今回、エイダンはフリーダイル王女の護衛役を務めていたはず。

「エイダン、王女はどうした?」

「お下がり下さい! 危険ですっ……っ!」

自分を押し留めようとした彼のうしろの砂地には、大量のまじない札と女物の黒いシヨールが、まるで打ち捨てられたように散乱していた。

魔導の波動はそこから広がり、今もなお膨張していた。地中奥深くから、何かが猛烈な勢いで迫っている。

「下がるのはお前達の方だ。お前の剣といえど、これは……」

すべての言葉が終わらぬうちに、足もとの熱砂が揺れる。足をとられて座り込んだサージ達の前で、突如起こったつむじ風に、周囲の砂と一緒にフリーダイル女王のものらしい呪禁符とシヨールが舞い上がった。螺旋を描いて上昇するそれらにみなが目を奪われている中、サージだけが気付く。空気に含まれた涼気と、久しく嗅いでいない匂いに……。

「……来る」

サージが洩らした声に、エイダンが振り返った。彼の言葉の意味を問おうと口を開いたが、さらに襲った激しい縦揺れと、巻き上がる大量の砂に阻まれる。

砂嵐に消されることなく響く地鳴りのような重低音とともに、それは地中より姿を現した。

「まさかっ……!」

エイダンの声は、驚きと砂に塗れている。恐るべき勢いで地を裂き、吹き上がったのは……何と天を貫かんとまっすぐに伸びた水柱だったのだ。

サージは咄嗟に左手を突き出した。旋回する風に巻き上げられた大量の砂は、彼の体表にぶつかる前に弾かれる。青く発光する掌を基点として、見る間にサージの身体を覆うように半円状の結界が構築されていく……目に見えない空気の層のような結界は次第に広がり、エイダンやその他の衛兵達まで包み込んで、荒れ狂う砂嵐から庇った。

ほどなくしてつむじ風は収まったが、ものすごい勢いで噴射する水は相変わらず残っている。

「……奇跡だ……」

信じがたい思いで眩き、サージはその手を下ろした。空気の層はかき消え、かすかな砂塵を含んでなお涼やかな風が、汗で額にはりついた髪を払っていく。頭上から降り注ぐ細かな水は、まるで氷のように冷えていた。

フリーダイル王女はどこに？

腑抜けになつたような頭がその存在にようやく辿り着いたとき、天高く舞っていたシヨールと呪禁符が、意志を持つようにある一点に集結していく……と同時に、地中から噴き出す水柱の中に現れた影。

「我が君っ…………！」

ようやく我に返ったらしいエイダンが腰から剣を抜き、サージの前に立つ。

「下がれ、エイダン」

サージはそう命じて近衛隊長の身体を押しつける。水の中を天高く駆け昇っていく姿は、まるで昇り龍だ。見上げた遙か上空では、水中から勢いよく飛び出した影に、風に舞い上がった呪禁符が巻きついていく…………強い陽光に反射する飛沫や、砂塵に紛れてその姿ははっきりとは確認できなかった。

「…………はぁ…………やっと少し涼しくなった」

轟々と吹き上げる水の音以外は静まり返った辺りに、どこか飄々とした声が響いた。

サージ達が見守る中、全身にまとったまじない札をきのこの傘のようにカサカサとはためかせ、空気の色を受けてゆっくりと砂地に降下する。その上から遅れてシヨールがフワフワと舞い落ちてきて、性別どころか人であるかさえも判断し辛い姿を、もとのように覆い隠した。

「……貴女がフリーダイル王女、アムリット姫？」

「そうだけど……あなた、誰？」

どえらい美形だな……問いかけてくる未来の夫に、そうとは知らぬアムリットは、あくまで客観的事実としてそんな感想を抱いた。

ああ、えらいところに来てしまった。

やたら弾力のある座蒲の上にポスンと座らされたアムリットは、目の前で繰り広げられる歓迎の宴に辟易していた。

無礼な近衛隊長を、ちよつと驚かせてやるだけのつもりだった。砂が目に入って「アイタタツ、ひえー、お助けえー！」くらいの、ほんの些細な意趣返しだったのに……「水呪」を受けている自分にとって、地下水脈を辿って水を湧かせることなど造作もない。目の前で喉から手が出るほど欲しがっている水を見せつけてやれば、目に少しばかり砂が入ったところで怒り狂うわけにはいかないだろう。その程度の軽い考えだった。

砂漠の水がどれだけ貴重か……確かに自分は理解していなかったと思う。

直後、現れたホレストルとかいう長老は、アムリットが掘り当てた地下水脈の水柱を目の当たりにして、マタタビを投げられた猫のごとく狂喜乱舞……次いで、抜き身の剣を自分に向けていた近衛隊長の顔面に「聖女様に向かって、この無礼者がっ！」と拳骨を叩き込んだ。まだまだ筋骨隆々、逞しい体躯をしたホレストルの一撃にど派手に吹っ飛ぶ彼の姿は、爽快感を通り越して寒気を覚えた。

長老の号令のもとに催されたアムリット歓迎の宴で警護任務につ

いている彼は、広間の入り口に立ち、今も鬼のような形相で自分を睨みつけている。遠目かつ褐色の肌であっても、殴られた左頬が腫れて赤くなっているのが分かるから、相当の打撃だったのだろう。そこまでする気はなかった、と今さら言っても怒りは収まるまい。

中央の舞台では、楽隊の奏でる異国情緒漂う管楽器の音色に乗って、透け感が半端ないシヨールをヒラヒラとなびかせ、これでもかというほどに小さな布切れで局部を覆っただけの美しい踊り子達が舞い踊っている。一糸乱れぬ動き、高い跳躍はまるで漆黒の刃が舞っているようだった。隙のない身のこなしは、確かにとっても美しい。

目の前にドンツと置かれた巨大な骨付き肉は、フリーダイルではあまり見ない独特な香りのする香辛料で味つけをされていて、少々鼻白んだものだが、さすがに手をつけないのはまずかろうと渋々食べた。胃腸が強くてよかったと思える焼き加減と豪快な味だった上に、あとで何の肉かを知らされて吐きたくなった。貴重な砂漠の移動手段を、この国の人間は食用にもしてしまうらしい。

湯水のせいらしく水はまったくなく、代わりに目の前に置かれた取っ手のついた大きなグラスには、真っ赤な液体が入っていた。それは随分度の強い酒で、呪いの副作用で相当の酒豪になっているアムリットだからこそ「ちよつと癖があるなあ」と感じるくらいで済む代物だった。他にもやたら巨大な金の皿に、果実だとか魚だとかの野性味溢れる色鮮やかな料理が、てんこ盛りになっている。うかうかくしゃみでもしようものなら、倒れてきそうだ。

床の上に敷かれた羅紗の絨毯や、直接座っている座蒲も見事な刺繍を施されているものだし、さきほど「嗜みますか？」と勧められた乳白色の喫煙具もきつと象牙を彫り出したものだろう。目に入るだけの嗜好品、食器、調度品のどれ一つとっても貴重なものだとい

うことは分かる。

そして、壁のない大広間には、宵闇の広がるこの時分になっても風はそよりとも吹かなかつただけけれど、代わりに左右から召使達が巨大な飾り扇で休むことなく風を送り続けてくれていた。

売りは潤沢な水と豊かな緑だと言えは聞こえはいいが、要は山奥のど田舎である故郷フリーダイルではあり得ない贅の限りが、ただ一夜の宴の中に凝縮されている。

熱晶国ヴェンダント、エリアスルートでも五本の指に入る大国……
… 湯水続きで国力の低下した状態で、このような絢爛豪華な宴を催せる財力は大したものだ。

……けどね。

アマリットは、まじない札の下で眉間にしわを寄せる。

綺麗なお姉ちゃんとお酒池肉林……こんな脳みそ筋肉の男しか喜ばんでしょーが。

絶えることなく飾り扇が送り込むそよそよと心地よい風に合わせ、アマリットは不自然にならない程度の息を吐き出した。カサカサと音を立てる呪禁符に、周囲に緊張感が走るのがありありと感じ取れ

る……そこまで自分と同席するのが苦痛ならば、歓迎の宴などさつさと終わってくれればいいのに。

「退屈ですか、アムリット姫？」

そんな彼女に、ごくごく控えめに声がかげられる。穏やかで落ち着いた、どこか甘い声音はすぐ隣に腰かけた人物のもの……目線だけ送るのは失礼か、と頭ごとそちらを見遣れば、再びザワザワと紙が擦れる音が立ち、やはり召使達の飾り扇を扇ぐ手に微妙な緊張が走った。

目もとに貼りつけられた呪禁符は特別なもので、アムリットの視界には何ら支障をきたさない。透明な遮光布を隔てて見ているようなものだ。

どえらい美形だな。

未来の夫だとはまだ知らなかったアムリットが下した、サージ王に対する感想である。

吹き上げる水流に乗って地上に戻った自分を見つめていた彼は、異国の自分の目から見ても整った顔立ちをしていた。琥珀色の肌によく映える深い緑の瞳に、背中に流した同色の長い髪がとても美しくかった。彫りの深い顔立ちに、理知的で落ち着いた双眸は柔らかな印象を与えていたし、金の縁取りと刺繍の美しい白いローブをまとった体軀は近衛隊長や長老ほど筋肉質ではなさそうで、武官には見えなかった。ほんの僅かに左手の甲が青い残光を放っているから、きっと魔術師なのだろう……そう思って、かけられた問いに、随分ざっくばらんに返事をしてしまった。

ヴェンダントの王の証は、金の細い輪で留められた肩にかかるくらのガトラという黒と白の縞模様の布である。

拒否権のない緊急招集で時間のない中、それだけ教えられてやって来たのだから、彼がサージ王だなんて思うはずがないではないか。大体、武力を重んじる元海賊国家の王が魔術師だなんて、闇討ちもいいところだ。

「アムリット姫？」

再び、不可解そうにサージ王が呼びかけてくる。自分を見ているのかどうかも分からない姿で黙り込んでしまったために、軽く無視されたと感じたのかも知れない。

「……しっ、したたか酔ったようなので、そろそろ休みたいのですがっ……っ！」

度重なる無礼で、さらに不興を買っては堪らない……何か返事をしなければ、と思つて咄嗟に返した言葉（本心）だったが、目の前の綺麗な顔は瞬時に固まった。

なぜ？

水を湧かすくらいに能かない片田舎のナメクジ女のくせに、せっかく催してやった宴にけちをつけるのか……そんな風に思っただろうか？

それとも、「成金趣味もここまで来たら立派な嫌がらせ」なんて考えていたのが、外にもれ出していたのだろうか？

「あの、私は別にっ……………」

アムリットが弁解を口にしようとしたそのとき……………。

「かしこまりましたっ、すぐに閨の準備を致しましょうぞおーっ
ーっ！」

凍りついた二人の間の空気を木っ端微塵に打ち砕いたのは、アムリット達からそこそこ離れたところで祝杯を挙げていたはずの、何とも耳聡い長老ホレストルの一声であった。

あまりにもあからさまな言葉と大音量に、ギョツとしてそちらを見遣れば、褐色に負けない赤ら顔の彼がグラスを放り出して広間から走り出していく背中が……………そして、彼がすり抜けていった入り口で直立不動の近衛隊長が放つ、射殺さんばかりの視線がアムリットの目に映り込む。再び恐る恐る傍らに視線を戻せば、サージ王はまだ固まったままだった。

いくら、塔にこもって二十八年、ほとんど外出もしない世間知らずなナメクジ女といえど、「閨」という言葉が何を示すのか、分からないはずがない。

本当に、えらいところに来てしまったっ……っ……！

これは、嫌がらせを通り越した拷問だ。

あれよあれよという間に召使達に押し込められた閨、目の前には件の「水呪」……否、水の聖女殿が相変わらずの出で立ちで、異様な存在感を放っている。部屋の四隅にかけられた小さなランプのさやかな光源に浮かび上がる姿は、およそ人とは思えなかった。どう鼻屑目に見ても、巨大なミノムシだ。美醜以前の問題で、萎えるほどの性の衝動など覚えようがない。身体中に貼りつけられた呪禁符は、その中にいるであろう彼女から、人間性を完全に剥奪していた。

王の妃達が住まう離宮のもっとも奥めいた場所に用意されたアムリットの部屋は、あからさまなほどに長老の意図が反映された造りになっていた。王宮とは違って頑丈そうな扉が打ちつけられた出入口の他には窓一つなく、ヴェンダントでは虫除けの意味合いもある天蓋のかけられた巨大な円形の寝台が中央に据えられた、ただ一間の部屋。鏡台やクローゼット、その他の調度品はそこそこ値の張るものではあったものの、サージがこの場所に対して覚えたのは尋常ではない閉塞感……例えるならば「高級な牢獄」だった。

どんな下位の魔術師でも、一歩足を踏み入れれば感じずにはいられない呪禁の力は、サージの魔導の力さえ無効にするほどに強力なものだ。この国では異質な分厚い扉には、呪いを封じる魔法陣が何重にも塗り込められているのだ。

魔導のかけらさえ持ち合わせていない人間ならば、何の違和感も覚えないだろう。

しかし、魔術師であるサージにとっては、違和感どころの騒ぎではない。呪いも魔導も紙一重なのだ。数多の見えない手で全身を押しさえつけられるような尋常ではない力は、空気を随分と硬く感じさせ、息をするのも辛い。自分でさえこうなのだから、アムリットはさぞや苦しんでいるはずだ……呪禁の魔法陣は、呪いが強ければ強いほどに、その威力を発揮するのだから。

寝台の真ん中に沈み込むように座っている差し向かいの彼女は、さきほどから、ひとときとして途切れずに呪禁符を震わせ、ザワザワと耳障りな音を立て続けている。

『……しっ、したたか酔ったようなので、そろそろ休みたいのです
がっ……っ！』

ホレストルが言う通り己を褥へと誘う言葉だったのか、言葉通り長旅に疲れてゆっくり休みたかったのか……表情どころかその視線の位置さえ見当のつかないアムリットの意図は窺い知れなかったが、どちらにしても、ここでは彼女の本懐は到底遂げられそうもない。お互い、呼吸をしているだけでいっぱいいっぱいなから。

「……陛下……灯り、消してもいいでしょうか……？」

そう思っていた自分の耳に、僅かに息が上っているようなアムリツトの声が飛び込んでくる。

やはりホレストルの考えが正しかったのか……一瞬前までサージが抱いていた彼女に対する同情の念は、潮が引くように消えていった。

きっと片田舎の祖国からは、王に取り入れ、取り込めと言い含められて来ているのだろう。ヴェンダントにとって死活問題である生活水を易々と与えられる立場は、取るに足らない小国を慢心させるに足るものだ。あの水柱を目の当たりにしたあととなっては、「跪いて、服従を誓え」と言われても従わざるを得ない……自分には、この国の民を守る責任がある。

「……あ、さつきみたいに誤解しないで下さいね。呪禁符外したいんですっ……この部屋の中だと、辛くって。中身は、別に見たくないでしょ？」

屈辱感に苛まれていたところ、そんな言葉が付け足される。浅い息の下にどこか飄々とした響きを含んだ声は、言外に「被害者面をするな」と言っているように聞こえた。そもそも此度の縁組は、アムリットにとっては拒否権のない召集令状のようなもの。なぜ呼び

つけたお前の方が、無理強いされているような顔をしているんだ、と。

人格など到底感じられない……そう思っていた目の前のミノムシから突きつけられた自国の疚しさに、サージは言葉を失う。

「陛下っ……そろそろ、限界なんですがつ……！」

ガサガサガサッと、呪禁符は一際大きな音を立て、続く声には隠しようのない苦痛が滲んでいた。

しかし、彼女に対する謝意よりも言い訳の色濃い言葉を考えていたサージは、すぐに返事を返せなかった。

「……もうっ、勝手に消しますからね！」

そんな彼に、いい加減焦れたようにアムリットは叫ぶ。それと同時に、部屋の中は深淵の闇に包まれた……あまりにも一瞬のことで何が起こったのかは分からない。灯りが消える直前にサージが目にしたのは、剥がれ落ちるまじない札と、その中から四方のランプに向かつて勢いよく伸びていった水流。

「ああああああー、ゲラしんどいよっ、身体中バキバキっ……済みません、陛下！ もう寝ますっ……！」

そして、ゴロゴロと寝台の上を何かが転がる感触と、ドサリと床に落ちた音……隔てる呪禁符が剥がれ落ち、幾分聞き取り易くなつた声が好き勝手言い終わると、墨をぶちまけたような真っ暗な部屋の中には、静寂が広がった。

「ゲラ」ってなんだ？

完全に置いていかれたサージが最初に抱いたのは、そんなどうでもいい疑問だった。

さきほどの音は、寝台からアムリットが落下した音だろうか。いくら呪われているとはいえ、妙齡の女性を、床の上で眠らせるわけにはいかない……。

「あっ………！」

そう思い直し、闇の中を手探りで彼女のもとに行こうとした途端、アムリットは短い叫び声を上げる。突然の声と音量にしたたか驚いて、サージは寝台の上で飛び上がりそうになった。

「陛下！ 眠ってる間は、私の身体に絶つつ対に触らないで下さいね………っと、そうだ、変な意味じゃないですよっ！ 今日はいろいろあつて疲れてるから、水呪の制御が効かないんです。変に刺激を与えなければ危険はないですけど、むやみに触ると溺死するかも知れません。まだ死にたくなかったら、今日はこのまま大人しく眠って下さい………じゃ、おやすみなさい！」

そう再び言いたい放題に言ってしまうと、ものの数秒で辺りには寝息が漂い始める。

こんな状況で眠れるかつ……！

サージ王の長い夜が始まった。

ガサガサガサガサガサツ……。

くずかごを野犬があさっているかのような不愉快極まりない音が耳を突き、サージの意識は浮上する。

一睡もできないかと思っていたが、強力過ぎる呪禁の魔法陣に抵抗し疲れて、いつの間にか気を失っていたらしい。寝覚めは最悪だ。まるで二日酔いをしたように痛む頭を押さえながら、寝台の上上半身を起こす。

今は、朝なのだろうか……巨大ミノムシはどこだ？

頭の中にそう定着してしまった第二妃の姿を探して、サージは周囲にぼんやりとした視線を送る。外からの光を受け入れる窓のない部屋の中は薄暗いが、四隅のランプには火が戻っており、眠りに落ちる前のように完全に視界がきかないわけではなかった。

「あ、おはようございます」

それに、広いといっても、所詮は一間の部屋の中、入り口から向かって右側の壁際に置かれた鏡台の前に、アムリットは……多分、立っていた。

「……辛くはないのですか？」

呪禁符をまとっている彼女に、サージは怪訝そうに問いかける。昨夜、わけの分らない「ゲラ」とかいう奇声を発しながら悶え苦しんでいた様子は記憶に新しい……けれど、今、目の前にいるアムリットは、声はこもってはいるもののしつかりしているし、耳障りだと思っていた呪禁符同士が擦れる音もそこまでひどくはなかった。ランプの灯りに照らされるアムリットの姿は、普通とはいえないが、初対面のときと何ら変わらない。

「一晩しつかり寝ましたから。約束通り、寝ている間に身体に触れないで下さって、ありがとうございます」

相変わらずザワザワと紙擦れの音を立てながら、身体を前のめりに曲げる。お辞儀をしたようだ。呪われている身の上でもない自分がいまだ苦しんでいるのに、「水呪」の彼女はただ一夜明けただけで復活したというのか……魔法陣とまじない札の二重の呪禁の力を受けながら、自立歩行ができるなぞ到底信じられない。扉に塗り込められているのは、呪いの強さに正比例する威力を発揮する魔法陣だ。例え、呪禁符が気休め程度の代物だったとしても、その効果は消えないはずなのに。

彼女自身に、「水呪」を制御する力が備わっているのだろうか？

だとしたら、地下水脈を違えず掘り当て、地盤沈下を引き起こさない程度に抑えて地下水を噴出させたのも、偶然ではなく意図的だったというのか……：：：：そういえば、昨夜もランプの火を消すために何もない中から水を発生させていた。

「水呪」の威力を弱めて魔法陣の目を眩ますことも、威力を最大限に強めて一都市を湖の底に沈めることも、枯れた泉を復活させるこ

とも、すべて一人の人間が思いのままにできるなぞ、脅威以外のなものでもない。

長閑な山陰の小国であったからこそ、今まで何もなかったのだろうが、アムリットは容易く強力な兵器となる……そのことを、他の何者にも気付かせてはいけない。

彼女に女としての興味なぞ皆無だ。

けれど、皮肉なことにホレストルの案に乗る以外は、道は残されていないようだ。今となつては、それがサージの義務なのだろう……彼女やフリーダイルの民達が知恵をつける前に、他国にその兵器としての「水呪」の利用を知られる前に、実行に移さなくてはならない。アムリットも、何も知らぬままに第二妃としての身分を受け入れたわけではあるまい。

痛む頭で様々なことを考え巡らせ、サージはそう結論づけた。

「申し訳なかったのは、私の方です。昨夜はホレストルが貴女の言葉を誤解してしまったせいで、長旅の疲れを癒すはずが、すっかり邪魔をしてしまいました。けれど、貴女の顔も見ることができないというのは、今後お互いの理解を深めて……」

「陛下、ちょっといいですか？」

そして、柔らかく意図を伝えようと、サージが慎重に選んで発していた言葉は、核心に至る直前でアムリットに遮られる。

「……何でしょうか？」

自分の言葉途中で割り込んできた彼女に、少々の不快感を覚えながら、サージは問い返す。頭痛のせいで、声音が少々硬くなってしまう。

「先に言っておきますが、私は『水呪』は自分の代で終わらせるつもりでいます。だから、相手は陛下に限らず子供を産むつもりもないし、その子に『水呪』を受け継がせる気なんてありません……まあ、陛下は一目見て聡明で優しそうな方だと感じましたから、我が子にそんな呪わしい業を背負わせるような馬鹿な真似はしないと信じていますけど」

言葉の一つ一つが鋭利な棘となって、柔らかな心臓に突き刺さるようだ。どんな顔をしてそんな慙懃無礼な台詞を吐いているのか……頭に血が上り、ガンガンと殴られたような痛みが走る。それでも、サージは返す言葉が見当たらなかった。

「ところで、ここは窓がなくて朝か夜かも分かりづらいですが、もうエイダの刻ですよ。王としての執務とか、あるんじゃないですか？」

さらに、紙札だらけの身体を傾けて、鏡台の上に置かれた香時計を示す。香炉に穿たれた穴の左から二番目の部分から、ほのかに緑色の煙が立ち昇っている……定例会議の刻限は、とつくの昔に過ぎていた。一瞬、その事実には背筋が凍りつくが、今の刻限までホレストルが人をよこさなかったことを考えれば、特に問題はなかったのだろう。第一、この事態は彼の本懐でもある。王として一番の責務を果たしていると思えば、満足しているのだろう。

吐き気が込み上げる……こんな息苦しいだけの部屋など即刻出て行きたいのが本音だったが、外でホレストルと顔を合わせて、根掘

り葉掘り成果を尋ねられるのも気が重かった。

「……アムリット姫、また来ます」

仕方なくそう口にし、寝台からのろのろと起き出したサージだったが……。

「来なくていいです、陛下は魔術師様ですから辛いでしょう？　こんなところに来る暇があるなら、第一妃様や王太子殿下のところに行ってあげて下さい」

二度と来るな、と言われたように思えて、アムリットに向けたサージの視線に不愉快が滲む。

こんなところ、二度と来たくないに決まっている。それでも、来ざるを得ない理由が自分にはあるのだ。アムリットの口から出た第一妃という単語に、ダラシアの顔が彼女の呪禁符まみれのそれになる……依然として続く頭痛のせいで、さらに怒りは募る。

「私達は、今後のことをもっと深く話し合わねばならないのですよ」

怒鳴り散らしたい衝動をなんとか抑えても、硬質化する声音だけはどうしようもなかった。

「確かに、話し合いは必要でしょうね。これは『水呪』の私が言うことでもないんですが、ヴェンダントは海に面しているんですから、湯水対策で呪いなんかに頼るよりも、海水を飲み水に変える方法を考えた方が、よっぽど安全だと……」

「貴女に何が分かる！」

ザワザワと呪禁符が擦れる耳障りな音と、その下のくぐもりながらも淡々とした声が発した言葉に、サージは今度こそ怒声を上げた。怒りをぶつけられたアマリットは一瞬、大きく身体を震わせたらしく、まじない札を激しくかき鳴らす。それさえも、彼の神経を苛立たせた。

「技術者でもない人間が口を出すな！ そんなこと考えなかったと思っているのかっ、どれだけの資金がかかるか分かって言っているのか？ それで万一成功しなければ、すべてが無駄になる……ヴェンダントには時間がないんだ！ そうでなければ、誰が好き好んで『水呪』の娘なぞっ……」

しかし、もつとも呪わしい言葉を発する寸でのところで、サージの中に理性が戻った。咄嗟にその手で口もとを覆ったが、出て行った言葉は戻らない。

目の前に立つアマリットは微動だにせず、もう不快だと思っていた音さえしなかった。

「……こんなことは、言いつもりではっ……」

何を言っても遅い。どう謝るべきかも分からなかった。

いくら姿かたちが巨大ミノムシにしか見えなくても、八つ当たりのような侮辱の言葉を投げつけていい理由にはならない。

「お気になさらず、陛下。慣れていきますから……そんなことよりも、出過ぎたことを言ってしまった、申し訳ありませんでした」

それなのに、返された言葉は自分への謝罪だった。

どちらが人非人か……問うまでもなく、心が痛んだ。

「本当に申し訳ありません。泉でも温泉でも、何でも湧かせますから……お願いですから、フリーダイヤルには……」

返事を返さないサージに向け、さらに続けられたアムリットの声音には、徐々に必死さが滲んでくる。

「何もしない！ 貴女には私に謝罪する必要なんてないんですっ……！」

これ以上のいわれのない謝罪は聞きたくなかった。矮小な自分への苛立ちが、語尾を荒くする。こんなことが言いたかったわけではないのに……悪いのは明らかに自分だというのに、アムリットに対する憤りが収まらない。このままでは、さらなる失言をしてしまいそうだった。

「謝罪はまた日を改めてっ、大変失礼致しました！」

自分を苦しめる分厚い扉の前で、何とかそれだけ伝えようと、サージはもう我慢できないというように部屋から出て行った。

「……やっぱいなあ、地雷踏んじやったわ」

一人取り残されたアムリットは、十分に時間を置いてそう呟いた。

己の浅はかさが恨めしい……ほんの少しの腹立たしさが我慢できなかつたなんて。

サージもホレストルという長老も、自分を安易な吸水機のようにしか見ていない。それ自体は構わない。フリーダイルがそれで安泰なら……今まで自分なんか生まれたせいで起こった数々の迷惑への罪滅ぼしと思えば、何の文句もない。厄介者が役に立ててよかった、湯水で苦しむ人達も助かって一石二鳥だ、くらいにしか思わない。

けれど、それはアムリット一代での話だ。

昨夜、自分が休みたと言った言葉に大袈裟に反応したホレストルの様子を見て、すべてが分かった。ヴェンダントは「水呪」を永代承継化させることを望んでいるのだ。

強力な呪いには、解く方法がなくとも、他に移す方法がある。その一つが、出産なのだ。どういう原理なのかは分からないが、親の固体遺伝子と同じように、呪いは子孫に受け継がれる。アムリットは呪われているからといって、その思考まで邪悪に染まっているつもりはない……お腹を痛めて産んだ、きっと可愛くてたまらないだ

ろう我が子にまで、こんな薄暗いものを背負わせたいとは思わない。人の蔑みを受けるだけの不自由な生活を強いられるのは、自分だけで十分だ。呪いは呪いであって、聖なる力になることはあり得ないのだから。

そう思った途端、口からは辛辣な嫌味が飛び出していた。

あんなに激昂するなんて……ろくな人間関係を経験してきていない自分には、出会って間もない人間の沸点を見極める力が圧倒的に不足していた。

そう思っても、ただのいいわけにしかならない。吐き出してしまった言葉は戻ってはこない。

「ああああー……っ、ごめんっ、フリッカー！」

本人不在では何の解決にもならないだろうが、それでもアムリットの口を突いて出たのは、齡十二歳にしてすでに両親以上に口うるさい実弟への謝罪の言葉だった。

呪われし王女……彼のナメクジ女も、もはやこれまでか。

コテンと横たわった寝台から、細かな刺繍編みの天蓋を透かして、鏡台の上に置かれた香時計を見つめながら、アムリットは心の中で独り言ちていた。香炉の右端の穴から、細くたなびくように天井へと伸びていた薄緑色の煙は、さきほど完全に消えてしまった。今はバリユファスの刻、冥界神の名を冠する刻限は、すべての生命が眠りにつく深淵の闇が広がる時分……よほどの大事でもなければ、来訪者が訪れることはあり得ない。

そして、よほどの大事が起こったとしても、近づきたいと思われないのが自分だ。

怒りに任せて口が滑り、王の不興を買ったのは三日前のこと……あれ以来、サージはこの部屋を訪れていない。それ自体は構わないし、当然だとも思う。

カサカサと、力なく口もとの呪禁符が揺れた。

さらに、それに呼応するように、生々しい音が下腹部から起こる。

「お腹空いたあー……」

口に出してしまえば、余計に空腹感が増してしまった。心身ともに疲れているはずなのに、眠気を凌駕する飢餓感のせいで、目を閉じていても一向に眠れやしない。

サージが去って三日、この部屋を訪れないのは彼ばかりではなかった。召使いさえ一人として現れず、当然なことに食事も運ばれてこなかった。

一日目は、うっかり忘れたくらいに考えていた。

二日目になって、少々フラフラしてきたものの、まあ水は自主供給できるから、と努めて気にしないようにしていた。

三日目にして、あの癖のあるリヤントの肉さえ恋しくなった。

人間、水さえあれば一週間は生きられると噂に聞くが、呪禁のきついこの部屋では「水呪」の力にも制約があつて、それまで体力が持つ気がしない。緑豊かなフリーダイルと違い、木々も疎らな砂漠の国ヴェンダントでは、空气中に含まれる水分を集めて、飲み水にできるまでろ過するには結構な精神力を必要とした。

『技術者でもない人間が口を出すな!』

今になって、自分がどれだけ無知蒙昧な言葉を口にしたのかを、思い知る。今まで簡単にできていたそれは、フリーダイルだったからこそ……国が違えば、気候も違う。必要とされる技術力も、ここでは格段に違ってくるのだろう。浅はかな馬鹿者は、アムリットの方だった。

サージは激昂しながらも、傷ついた顔をしていた。

権威を盾に、頭ごなしに怒声を浴びている絶対的弱者はアムリットなのに、なぜ弱い者虐めをしている気分になったのだろうか、とそのときは不思議に思ったのだが、理由はそういうことだ。

呪われた女を妻に迎えたいと思う人間なんて、いるはずがない。議論に次ぐ議論、熟考に熟考を重ねた結果、国民を守る義務のある王サージに白羽の矢が立っただけのこと……彼だつて被害者だ。

虐げられ慣れている自分だからこそ、サージの心の痛みに気付いてやらなければならなかった。やられてやり返したでは、遺恨しか生まれないことは、二十年前に痛いほど思い知らされている。物事の良し悪しに関係なく、年長者が先に折れてやることも、喧嘩ではよくあることだ。

今の自分には、また来ると言っていた言葉と、一時の怒りでせつかくの吸水機を放置死させるほど愚かではないと信じて、王の再訪を待つしか道はない。

とにかく、彼が来たときは、外交だとか政策だとかの小難しいことは脇に置いて、真摯に謝ろう。ついでに、フリーダイルではなく、アムリット自身への仕置きだけに留めてくれた（んだらう、多分）心の広さも絶賛しておこう。

ぐうづうう……。。

体力、精神力の限界がくる前に、次の機会があつたらだけど。

* * *

王家の管理する聖泉ファールランドは、メヌーク王家の象徴である八本の石柱テベリクに囲まれていた。その周囲をさらに囲うように神殿が建てられ、吹き抜けの上空からは燦々と日の光が差し込んでいる。テベリクの尖った先端に貼られた金箔が太陽光を反射し、周囲には神々しいほどの光で満ち溢れていた。

「少々痩せられましたか、陛下。さては恋煩いですか？」

蒸発しそうな炎天の下にもかかわらず、背筋が凍りつくような薄ら寒い冗談を吐いたホレストルに、サージは一瞥もくくれる気になれなかった。

いくら渇水問題に解決の目処が立ったとはいえ、あまりにも浮かれ過ぎだ。神聖な泉ファールランドを前にして……といっても、肝心の泉が干上がっているのだが、それでも不敬であることは変わりない。

エリアスルートは、神代が終わったときから三つの世界に分かれている。天上界には創造神達とそれらに従属する聖獣が住まい、冥界には冥界神バリユファスを要とした破壊神達、同じくそれらに従属する聖獣、そして、地上には人々と、天上界、冥界に住むことを拒み、その代償として魂の器である肉体を捨て、精霊となったかつての聖獣達が共存していた。地上に住まう精霊達は人の目に映る姿かたちを持たないために、自然の中に溶け込んでいった。そのため、風火水土の属性が特化された場所には、それぞれに属する精霊が宿っているといわれている。

砂漠の国ウエンドントにおいて、枯れたことのなかった泉ファールランドは水属性の精霊が宿っているとされ、その恵みに感謝して神殿が建立されたのだ。その泉も今、神秘的なまでに青く輝く水面を失い、乾いた砂で埋もれていた。来るはずの雨季も、いまだやって

来ない。ファールランドの精霊は死んだのか、いずこかへと去ったのか……神や聖獣、精霊達を崇め奉ることはしても、魔術師の類を切り捨ててきたヴェンダントには、人ならざる聖獣、精霊の声を聞くことができる聖獣使いもおらず、それを確かめる術はなかった。

聖なる泉を復活させるには、まずは精霊の所在を確認することが先決だ、とサージは、聖獣使いをヴェンダントへ招くことを提言した。魔導の力に差別的なホレストルを始めとした重臣達は、その言葉に耳を貸さなかった。次に、海水ろ過装置の開発を打診したが、その開発資金の見積もりを出した段階で、却下された。

あの朝、アムリットにぶつけた言葉は、そっくりそのまま己に突きつけられたものだったのだ。握り潰された自分の提言、その屈辱の捌け口に、彼女を使ってしまった。

忌まわしい存在、およそ人には見えない姿かたちをした「水呪」の娘は、どこまでも真つ当で……自分を含めてヴェンダント人達よりも「人間」らしかった。己の暴言を「慣れている」の一言で一蹴し、祖国の民のためだけにその心を砕く。忌まわしき存在は、呪わしき外道は一体どちらだ。

もつと貪欲に、いつそ薄汚いほどに利権を主張してもらいたかった。アムリットを悪に仕立て上げれば、己の所業を正当化できるから……浅ましい想いに気付かされたことが、サージには腹立たしかったのだ。

紺碧の空を映して煌めいていた美しい泉の消失とともに、この国の誇りは地に堕ちた。砂に塗れて、民族の矜持はもつどこにも探せない。

「では、陛下……こちらを」

神殿の奥から現れた神官長はそう言っつて、サージに水差しを手渡す。細く長い差し口のその中には、ファーランドが枯れ切る前に汲んでおいた泉の水が収められていた。コルク栓を外したサージは、かつての泉であつた場所に一頻り回しかける。砂は僅かな湿り気を帯びるだけで、他には何の変化も起こらなかつた。

その次に、腰に帯びていた短剣を抜き、己が左掌に宛がう……そして、迷うことなく横一線に薙いだ。噴き出す血が砂地を染めるとともに、手の甲には青い発光が生じる。

『メヌークの血とともに誓つ、汝らに仇なすものではないと……』

公用語のパシユミル語ではなく、いまや限られた者達しか知らない神代の言葉で呼びかけたのは、精霊に対してだ。相変わらず流れ落ちる血は、いたずらに砂地を染めるだけには留まらず、まるで意思を持つ軟体動物のように一続きにグニヤグニヤと這い回り、何やら文様を描き始めた……渦を巻き、鉤を作り、見る間に八つの角を持つ複雑怪奇な魔法陣が形成されていった。

その手から最後の一滴が滴り落ちると、頭の部分かしらがそこに向かって伸びていき、尻尾に咬みつく蛇のように癒着して、一体に重なる。そして、魔法陣は青みを帯びた強い光を放つと、一瞬後には何事もなかつたかのようにかき消えた。あとには僅かに湿つて色の濃くなつた砂地だけが残り、サージが流した血の跡もなくなっている。

「効果はいかほどですか、陛下？」

「あの部屋の扉に塗り込められたものには劣るが、それでも彼女に

は十分だろう」

こんなもの、どうせ気休めだ……そう分かってはいたが、サージはそれをホレストルにも神官長にも伝える気はなかった。

彼が己の血を使ってフアーランドに施したのは、呪禁の魔法陣だった。アムリットをここに招き、地脈を辿って泉を蘇らせるためには、例え見せかけであったとしても、聖職者達を納得させなければならぬ。国王であるサージが折れた後も、「水呪」の娘の受け入れることを、最後まで強固に反対していたのは、フアーランド神殿の神官長だったのだ。

それでも、ホレストルが無理矢理押し切って迎えたアムリットは、到着直後にデイル・マースの城門前で見事に地下水を湧かせてみせた……それを目の当たりにした彼が狂喜乱舞したのは、自身に逆らう神官長の鼻を明かせたためでもあった。

「いつ頃いらっしやるのですか、その……聖女様は」

僅かに中身の残った水差しをサージから受け取る神官長の顔は、僅かに歪んでおり、まだ完全に納得したわけではないことを物語っている。それでも、もう反意を唱えることはしなかった。

「明日にも連れてこよう、くれぐれも失礼のないように」

どの口で言っているのか……神官長の目に映り込んだ己の空々しい微笑みに嫌悪感が突き上げ、傷ついた左手を構わず握り締める。

「サージ様っ……………」

切羽詰まった声に続き、ドタドタと石畳を駆ける足音が耳を突く。振り返ると、神官達をかき分けて近衛隊長のエイダンがやってくる場所だった。蒼褪めたその顔が、大事を告げている。

「エイダンっ、聖域で無礼なっ……………!!」

「構わん、何用だ」

即座に叱責にかかるうとしたホレストルを制止し、サージは彼がやって来た用向きを尋ねる。

「水呪っ……………いえ、聖女殿のことです……………!!」

エイダンの口から出た言葉に、サージは瞠目する。初見での印象が最悪だったためか、アムリットのことを舌に乗せることも毛嫌いしていた彼なのに……………。

「私にはどういふ状態か、判断がつかぬのです。どうかっ、すぐに……………!!」

言葉が終わる前に、サージは駆け出す。

「陛下っ……っ！」

浅く被っていた頭冠が外れ、いつかと同じようにガトラが頭から滑り落ちる。既視感を覚えるホレストルの怒号も振り切り、ただ走り続けた。

カノワの汁で隙間なく壁面に癒着された分厚い扉を開ければ、そこには密林があつた。

ゴリ、ガリ、ゴリガリゴリッ……。

水蒸気の濃い霧がかかった部屋の中には、硬い物を咀嚼するような奇怪な音が響いていた。置かれていた調度品がすべてなくなっており、床に敷かれていた羅紗の絨毯も取り払われている。一体如何様にしてこの短期間に成長したのか、むき出しの石畳を割って、高く伸びた木々は青々と葉をつけた枝を広げ、完全に天井を隠してしまっていた。頭で分かっているながらも、屋外ではないかと錯覚する。

サージが飛び出すように部屋を出ていってから一週間、一体何が起こったというのか……大人二人を重ねたほどの厚みのあつた呪禁の魔法陣の扉は、外側からカノワの汁で塗り固められていて、叩き壊さなければ部屋に入ることができなかった。アムリットの姿も、いまだ見当たらない。

これは彼女の仕業だろうか？

自分が中にいると見せかけるために扉を封印し、その上でヴェンダントを出奔したのだろうか？

そんな考えがサージの頭を過ぎったが、それも不自然だった。カノワの汁を入手する術も、部屋の中に木々を生やす必要性もまったく思い当たらない。

他に考えられるのは、「水呪」の力の暴走しかない。制御不能となった強力な呪いが、自然界では到底あり得ない怪異を引き起こしたと考える方が、現実的だ。

そして、もしや、その引き金となったのが、アムリットに向けて吐いたサージの暴言だったとしたら……あのよう醜い言葉、何度投げつけられても慣れるはずがない。呪いの暴走は、向ける相手を選んだりはしない。地下水脈を掘り当て、ただの数日で何も無い場所に木々を生やせる「水呪」が、彼女の身に何の危害も与えないわけがないのだ。

アムリットの姿が見えないのは、逃げたからではなく、「水呪」の暴走に巻き込まれて死んだから……サージの自分本位の身勝手な言葉が、彼女を殺した。

「アムリット姫っ……!!」

身の毛がよだつような恐怖が襲い、その名を呼んだ。

「はいっ……?」

「ひいつ……！」

「ぎゃあっ！」

間髪置かずに戻ってきた返事に、サージとうしろに控えていたエイドンは叫び声を上げて飛び上がり、掘り返された石畳の破片に足をとられて、その場に尻餅をついてしまった。

ほとんど腰を抜かした二人の耳と目に飛び込んできたのは……。

「……大丈夫ですか？」

ちょうど寝台のあった部屋中央に生える、一際円周の太い大樹の枝の上から、釣り下がるように現れた巨大ミノムシの姿だった。

「……あ、ああ、ああっ……アムリット、姫っ……？」

「はい、だから、何でしょうか？」

完全に裏返ったサージの呼び声に返ってきた返事は飄々としていながら、ガサゴソいう紙擦れの音にくぐもっていて、彼女でしかあり得なかった。木からぶら下がるその姿は、まさにミノムシそのもので滑稽だったが、到底笑う気にはなれなかった。

「このっ、くそっ……何をしとるんだっ、貴様はっ……！」

それ以上どうしていいやら分からないといった様子で大口開けて固まってしまった彼の隣で、どうにも辛抱堪らなくなったというように、エイダンは怒声を張り上げる。

「何してるって、自給自足だけど？ 誰もご飯持ってきてくれないし。扉は開かないし、呼んでも何しても、無反応だし。呪われてるからって、人間なんだから食べないと死ぬのよ。変な死に方したら、その土地に呪いが沁み込むんだからね……そしたら、困るのあんたらでしょーが」

さすがにムツとしたようで、早口にそれだけ言ったあと、アムリットは呪禁符をかき鳴らしながら、石畳の破片が転がる床の上に飛び降りた。いつかと同じようにまじない札が空気を孕んで、ザワザワと大きな音を立てるが……。

「いてっ！」

その音に混じって、ゴンツという重い音とエイダンの苦痛の声が上がった。彼の額にぶつかって跳ね返り、傍らのサージの足もとに転がってきたのは、なんとも硬そうな木の実だった。どうやら、枝から飛び降りたと同時に、アムリットが投げってきたものらしい。

「それ、ウゲウゴガルの木の実ね。すごく硬いけど、慣れれば食べられなくはなかった。バツチャが言ってたのよ、名匠が作った家具とか家とかの木達は、切られたあとでも生きてるんだって。鏡台とか寝台とかバラして、バツチャに教えてもらったおまじないかけながらお水あげてみたら、こんなに育って、いっぱい実もつけてくれた。ヴェンダントが呪われるより、随分安い代償だと思うんだけど……違いますか、陛下？」

十分凶器となり得る硬さを持ったその果実に目を奪われていたサージは、最後に話の矛先を向けられ、弾かれたように視線を上げる。相変わらぬ視線も捉えられない異様な出で立ちに、声音も平静そのもの、淡々としていたが、間違いなく怒気を感じる。

「もうフリーダイルに帰してもらえませんか？」

彼女が続けた言葉は問いかけの形をとっていたが、サージの耳には断固とした宣言に聞こえた。

「何とかなるかと思ってましたけど、ほとほと思い知りました。ヴエランダントの気候は『水呪』の私には合ってませんし、一番きついのは気力です。私は陛下のような魔術師じゃありませんから、ここ二十年ほどフリーダイルで大きな水害を起こさずに頑張っただけなのは、ただの精神力なんです。こんな私でもちゃんと人間として愛してくれる家族とバツチャが側にいてくれたから……その人達は絶対に哀しませたくない。フリーダイルでなら、何があるうとも『水呪』の被害を食い止める意志を持てます。けど、私の呪いにしか興味のないヴエランダントは、どんなに思い込もうとしても、祖国のようには愛せない。罪のない国民の皆さんには申し訳ないですけど、心から守りたいとは思えないんです。今後こんなことが続くようなら、いずれ私の心は折れます。この国は砂じゃなくて海の底に沈むことになりますよ」

今まで溜めに溜めてきた理不尽な扱いに対する憤懣を、アムリットはすべて吐き出した。もうどうなっても知ったことではない。もしもヴエランダントが「水呪」を手に入れるため、フリーダイルに拳兵するというのなら、さきほど宣言したとおり、何一つ残さず海の底に沈めてやる。それが、自分の命と引き換えになっても構わない。

そんな気迫が伝わったのか、ウゲウゴガルの実をぶつけられた
 Eidan さえ、何も言い返さなかった。その視線にいつもあった懐
 疑と侮蔑の色は、薄暗く濁った何かに変わっている。

「約束したからには、泉は湧かせます。ヴェンダントの下には大き
 な地下水河がありましたから、そう簡単に枯れることはないはずで
 す。それが終わったら、お願いですからフリーダイルに帰して下さい
 」「

圧倒的に不利な状況、自分達に非があることも否定しようがない
 ……それでも、彼女が要求するのは、今日までの冷遇からは考えら
 れないほどに、ささやかなものだ。その利は、ヴェンダント側には
 過ぎるほどにあった。

「……………ああ、そうだった」

しかし、思い出したというような呟きに、サージは再び猛獣に睨
 まれたように身を固くする。

「一週間前は、分かりもしないのに好き勝手言って済みませんでし
 た。あのあと、魔法陣と暑さに戦いながら空気の中からお水出して
 いて実感したんです。ゲラ……………じゃなくて、すごくしんどかった。
 その土地や気候によって難しいことってあったんですよ。海水を
 飲み水につて、安易なことを言ってしまうって、本当にごめんなさい。
 あの発言は、私が悪かったです」

戦々恐々と見つめるサージにかけられたのは、真摯な謝罪の言葉
 だった。

ザワザワと吐息に揺れる呪禁符の下から聞こえてくるのは、とて

も静かな声音で、媚びたり演じたりしている響きは感じられない。大体、今の彼女にそんなことをする必要なぞないのだ。それ以上の非がある相手に対して、怒りを一旦脇に押しやってまで謝罪をすることが、一体何の得になるのか？

呪禁符に覆われたその下で、一体どんな表情を浮かべているのだろう……。

「陛下……人が謝ってんですから、返事くらいしたらどうですか」

どこか呆けたような表情で自分を見つめるだけのサージに、アムリットはいい加減うんざりだというように投げかけてくる。

「……申し訳ありません」

口から勝手に言葉が零れ落ちた。

「本当に、申し訳ありません……が」

「……が？」

妙に間延びのした接続詞を、アムリットは怪訝そつに復唱する。

「貴女をフリーダイルには帰したくない」

期せずして飛び出し、否定で結ばれた一言は、その場に居合わせ
た三人全員にとって予想外だった。

「貴女をフリーダイルには帰したくない」

年若く美しい大国の王にそんな言葉をかけられ、縋りつくような必死さの滲んだ視線を送られて、心揺れない乙女はいないだろう……しかし。

ナニ寝言言ってやがるんだ、この馬鹿は。

アマリットは、呪禁符の下に隠れた眉を盛大に顰めていた。

どんなに見てくれが美しかろうが、己を餓死寸前まで追い込んだ相手に、なぜ心惹かれてやる必要があるのか……大体、世間一般における婦女子と自分とは違うのだし。

「誰が好き好んで『水呪』の娘なぞっ……!!」

同じ口からそんな言葉を投げつけられたのは、わずか七日前のことだ。馬鹿にするにも程がある。魔術師のくせに、「水呪」の恐ろしさが何一つ分かっていない。

いくら田舎とはいっても、過去にはフリーダイルにも「水呪」を利用して一山当てよう、なんて馬鹿な考えを抱いて近づいてくる者達がいた。子供だった自分は、そんな人間達の欲のせいで、村一つを湖の底に沈めてしまうという取り返しのつかない失態を犯したのだ。幸いなことに死者こそ出さなかったが、そこに住んでいた数十人の人達が、大切な故郷と生活基盤を失った。「水呪」を利用しようと思論んでいた人々は被害者に紛れ、一緒になって声高にアマリットを責めた。

自分の罪科を両親に贖えと迫った彼らに、アマリットは己自身が断罪を受けることを告げた。気休めに過ぎない呪禁符だらけの異様な姿で、魔障壁を張り巡らせた呪禁の塔で生涯の幽閉生活を送る……今後一切市井にその姿を見せないと誓った。すべては強制ではなく自分の意志であり、浅はかだった幼い自分への戒めだ。もうこれ以上、人の欲望を寄せつけさせはしない。もうこれで、呪われし咎人の力を利用することなどできまい。その存在を蔑み、恐れられても、自分のせいで誰かが泣くことはないはずだった。

アマリットが苦勞して作り上げた危うくも平穩な生活を叩き壊し、利用した拳句に放置死させようとしておいて、それが失敗すればまたぞろ懐柔しようというのか……目の前の理不尽という言葉の意味を、まったく知らないらしい厚顔無恥な若造に、遙か高みにあったはずの沸点はとうの昔に振り切れていた。

祖国のために我慢しようと思った。その想いはサージも同じで、

立場は違えどもともに被害者だと思っていた。

けれど、こんな奴を思いやる必要は端からなかったのだ。

アマリットが提示した湯水問題の解決と、出過ぎた言葉の謝罪……それを耳にしたサージは、己という人間（彼はそう思っていないかも知れないが）を、誤認したようだ。

まだまだ利用できる、飼い慣らせると。

呪禁符がカサカサと耳障りな音を立て始める。アマリットは、自分が小刻みに肩を揺らせていることに気が付いた。

人間、本気で切れると、逆に笑えてくるらしい。

「……………、馬鹿馬鹿しい」

ため息とともに、こぼれ落ちていった言葉は、ジメジメと鬱陶しいほどの湿気を含んだ部屋の中に、冷たく響いた。

「アマリット姫、私はっ……………」

外見だけでなく、その内側から発散する異様な雰囲気を感じ、サージは再び声を上げようとしたが……………。

「姉上……………」

突如、甚だ場違いなほどに元気のよい少年の大音量が辺りに響き渡り、彼の次句はかき消される。

この声はっ……アムリットの怒りで覆われていた思考は、ここにはあり得ない声に寸断された。さきほどから鳴り続けていた呪禁符まで、驚きで甲高く音を変える。

「フリツカーっ……？」

信じられない思いで呼号を上げたアムリット、そして、鉄槌で叩き壊された扉を振り返ったサージとエイダンの目に飛び込んできたのは、金髪碧眼の少年だった。小生意気で綺麗な顔は、アムリットの記憶の中の実弟と寸分違わない。彼は呆気にとられるサージとエイダンの脇をすり抜け、勢いよくピョンっとな彼女に飛びついてくるが……。

「暑っ……!!」

そうすぐに言い放って、姉の身体を突き飛ばした。突き飛ばされたアムリットは、そのままの勢いで背後のウゲウゴガルの木にぶつかる。傾いだ頭はゴンっとな小気味のいい音を立てた。

衝撃に眩む景色、開いた瞳孔に飛び込んできたのは瞬く星の群れだった……つまりは、とてつもなく痛い。

「あいつだぁー……っ！ あだ、いぎな何すらーさっ！」

木の根元に小さく蹲り、盛大に呪禁符を震わせる彼女は、諸々の感情を凌駕する痛みの前に、素の音でフリッカーを怒鳴りつける。

しかしながら、その口から飛び出した言葉は、サージとエイダンには皆目見当のつかないものだった。

「ダメダメ、姉上……方言出てます」

「あづぐうづう……、死ぬかと思った」

低く唸りながらも、アムリットが再び発した言葉は、痛みに塗れて甚だぞんざいではあったものの、辛うじての標準語であった。二人のやり取りを前に、傍観者になり果てたサージは、混乱した思考の果てに、以前アムリットが口にした「ゲラ」という言葉を思い出す……あれもフリーダイルの地に住まう者達の方言だったのだろうか？

「この程度で死ぬほど軟にできてないでしょ、姉上は。そんなことより、早く冷たい水出して下さい」

「……何で？」

両の手を器のように合わせて眼前に差し出してきた弟に、アムリットは怪訝そうに尋ねる。いまだ後頭部（らしき箇所）を木にぶつけた痛みが引かないらしく、小刻みにカサカサという紙擦れの音は続いていた。

「暑いんですっ！ ナメクジ女のくせに、何でこんなときに熱湯沸かしてるんですかっ！ 姉上の取り柄はどこでも保冷機になれることですよ！」

「……っ……初めて聞いたわよ。あんだ、いつもジツトジツトの鬱陶しい力って言うってたじゃない」

ザワザワと溜め息を吐き出しながら、それでもアムリットはフリツカーの掌に向けて、呪禁符の下から小さな流水を迸らせる。傍からしてみれば聞くに堪えない罵詈雑言でも、数週間ぶりに見た変わらぬ弟の姿に、直前まで彼女の胸を占めていた怒りが急速に力を失っていく。そして、その隙間を埋めるように懐かしさが広がっていった。

「……ふうー、生き返った」

「あんだ、その年でホントにおっさん臭いわね」

呪われた姉を洗面台代わりに使ってしまう豪胆な彼が、ひとしきり顔を洗ってすっきりと呟いた頃には、アムリットは一応の余裕を取り戻し、呆れたように突っ込んだ。それとともに、実に絶妙なきに現れたフリツカーに、安堵とともに感謝の念を覚える。あのままでは、きつと自分は「水呪」の力を暴走させていた。ヴェンダンの運命なぞ今となってはどうでもよかったが、あと一歩でも来るのが遅ければ、弟を未曾有の大水害に巻き込んでしまったかも知れないのだ。後頭部はまだまだ痛むけれど、取り戻した心の平安は大きく、気分は最悪というほどではない。

「ジツト王女と呼ばれる姉上に言われたくないです……それにしても、なんなんですか、この部屋？」

人心地ついたフリツカーは姉の嫌味も軽くないなし、密林と化した周囲を見回して、胡散臭そうに言った。

その言葉に、アムリットに再び緊張が走る。ヴェンダントに発つぎりぎりまで、彼からは、ヴェンダントに粗相のないように、サージ王を怒らせるな、と口を酸っぱくして言われていたのだ……今回のことを知られれば、この口やかましい弟に何と言われるか。アムリットにとつて、大国の王よりも、片田舎の祖国の小さな弟を怒らせる方が大問題だった。

落ち着け、自分……そう思っても、まじない札は己の動揺を騒がしく辺りに知れ渡らせる。

「……っ、……あ、のっ……そーだ！ あんた、ここに何しにきたの？」

「もちろん商談ですよ……あ、まさか僕がわざわざ姉上に会いにきたんじゃないかと思ってるんですか？ こっちは食っちゃ寝してるだけの姉上ほど暇じゃないんですよ、冗談は格好だけにして下さいよ。陛下に謁見を願い出たら、こちらにいらっしやるって聞いたものですから、ここで姉上に会ったのはただの誤算です！」

「……ソーデスカ」

再会を「誤算」と一蹴されるのはモヤモヤしたものが残るが、話が逸れたことにアムリットはホッとすする。

「というわけで、陛下はお借りしますよ……って、姉上に断る必要なんてないんです。さ、陛下、こんなジメジメしたところはさっさと出て行きましょう。フリーダイルとヴェンダント間の革製品の輸入条項見直しについて、話したいことがいっぱい……」

「ちよつ、ちよつと待つてよ……フリッカー！」

ホツとしたのも束の間、まだへたり込むように座り込んでいるサージにフリッカーは手を差し伸べている……アムリットは慌てて呼びかけた。二人に話をさせるなんてもつての外だ、自分が宣戦布告に近い言葉を王に叩きつけたことが知られてしまう。

「うるっさい、姉上！ こっちは遊びに来てるんじゃないんです。食っちゃ寝ばかりしてないで、少しは部屋の掃除ぐらいして下さい。こんな瓦礫がゴロゴロしてたら、また誰かが転びますよ！」

軽蔑するような一瞥と叱責をアムリットに投げつけると、フリッカーは今度こそサージを伴って出て行ってしまった。サージは何ともいえない視線をアムリットに注いでいたが、結局それ以上一言も発さずに壊れた扉の向こうに消える。

「……まるで豆台風だな」

去っていく二人の背を見つめながら、エイダンが吐き出した。

否定はしない……っていうかできない。……けどさ、何であんたが残ってんの？

フリーダイルの王子フリッカーを伴って王の間に移動したサージは、召使達に退室を命じる。彼らが退室してからも暫くの間、フリッカーは藍色の御簾が吊り下げられた入り口をじっと見つめていた。

「その御簾にはカギンが編み込まれていますから、外に会話が漏れる心配はありませんよ」

サージは彼が抱いているだろう危惧に向けて、そう説明する。

厳しい砂漠の気候に合わせて、ヴェンダントでは少しでも風通しをよくするために、王城デル・マースを始めとするほとんどの建物の入り口や窓には、扉をとりつけていない。それによって引き起こされる諸々の不都合、不具合を解消するのに重宝されているのが、魔導石を編みこんだ御簾なのである。王の間の入り口にかかっているのは、しなりのよいギャンバスという植物の表皮を細く裂き、丈夫な刺繍糸で編んだものだ。軽くて空気の通りもよいが、編み込まれた大海原を模す図案のそこに輝く緑の魔導石カギンによって、外からは部屋の中的一切を伺い知ることはできない。反対に、部屋の中から御簾を透かして外の様子を見るには何の差し障りもないために、侵入者も容易に近づくことはできないのだ。

納得したらしいフリッカーはようやくサージを振り返り、純粹無垢な微笑みを向けた。あどけなくも美しいその容姿は、姉姫アムリットと実の姉弟だとは到底思えなかった。

しかし、サージは弱冠十二歳の彼が一筋縄ではいかない難物であることを知っている。

「長老議會の方々が来られる前に、陛下に一つ確認しておきたいことがあります」

弧を描く薄紅色の唇から吐き出された言葉には、異様な迫力がほとばしっていた。

山陰の小国フリーダイルの王子は、姉姫と違ってまったくの健康体で、その容姿も整っている。天鵝絨ビロードのリボンで無造作にまとめられた緩く波打つ蜂蜜色の髪に、同じ色の長い睫毛で飾られた円らな蒼い目も、まるで神秘の泉のようだ。まだまだあどけなさは残る小さな鼻と口も形よく、線の細い身体の輪郭も、彼が姫であったならと残念に思うほどに優美だ。文化の違いはあるが、上下の分かれた旅装束らしい着衣も流行遅れにならない上品な型のもので、彼の洗練された美的感覚を物語っている。

一度、此度の縁組とそれにかかわる諸々の契約事項を取り決めるため、ホレストルとともにフリーダイルを訪れて対面した彼には、正直驚かされた。交渉の場での立ち居振る舞いは実に板についており、自国の王と重臣達を差し置いて条件面を切り込む発言の鋭さは、サージだけではなくホレストルも危惧を覚えるほどに的確だった。片田舎の小国に埋もれさせるには、実に惜しい人物であると思ったものだった。

「ヴェンダントが欲しているのは余計な知恵も手垢もついていない『水呪』であって、片田舎の小国の王女ではない。それ以上もそれ以下も望まない、アムリットにそれを悟らせるような下手も打たない……陛下もホレストル様も、そうおっしゃっていましたよね。今回のことは、間違いなく契約違反です」

さらに続けられた言葉に、サージは瞠目する。

「姉には、この片割れを持たせています」

そう言って、フリツカーが上着の下から引っ張り出したのは、鎖の先に繋がれた瑠璃色の輝石だった。卵形をしていたものを、真つ二つに割ったような形をしている。

「まさかっ……」

「メトリアの双子石です。持ち主に命の危険が迫れば青の点滅で、もう一方を持った者に知らせる……」と、魔術師でいらっしやる陛下には、そんな講義はいりませんでしたね。四日前に青い点滅を始めたから、急いでやってきたんですよ。姉の死は一人の悲劇では済みませんからね。『水呪』の暴走でヴェンダントが海底に沈む前に来る事ができて、本当によかった」

純粹無垢な微笑みを浮かべながら、何とも恐ろしいことを言っている少年に、紛うことなき脅威を感じた。

まるで巨大ミノムシのような姿……そして、ディル・マースに着いたと同時に見せつけられた「水呪」の力の前に、呪禁符のその下のことを完全に失念していたのだ。素肌の上、じかにまじない札をまとっているわけではない。あまりにも異様な出で立ちと登場に、自分達の目は眩まされていたのだ。離宮に入る前……つまりは、閨をともしする前に本来なら行われるべき身体検査が、アムリットにはなされなかったことにも、それは現れていた。

メトリアには通信機能がついている。今の今まで、この国の内情は彼女を通してフリーダイルに完全に漏れていた……己がぶつけた

言葉、強いた無体とともに。

「あ、通信機能は使っていませんよ。姉には餞別だって渡しただけで、魔導石だとは伝えていませんから。大体、間諜なんて、そんな器用な真似できませんしね……あんな見てくれをしますし、少々やさぐれてはいますけど、僕なんかよりよっぽど純粋な人間ですから」

フリツカーが敢えて選んで口にしたのだろう「人間」という言葉が、どんな非難や脅しの台詞よりもサージの胸を抉る。彼は、自分が抱いている罪悪感と動揺を余すところなく見抜いているのだ。

「償い、はっ……」

「契約履行以上のことをフリーダイルは求めません。たかだか一週間であんな枯れ木みたいな身体にならないように、ちゃんとした食事を与えて下さい。ウゲウゴガルの木の実だけでは栄養が偏ります。そして、必ず一年後には、五体満足でフリーダイルに帰して下さい」

発しようとした言葉は、ゆっくりと距離をつめてきたフリツカーに遮られた。己の胸元ほどの背丈しかない王子に気圧される。事情を聞かない、謝罪も一切受け付けない、というその姿勢が、愛くるしい笑顔の下に秘めた怒りの苛烈さを物語っているような気がした。サージはアムリットと対峙したとき以上の、途方もない焦燥感に駆られる……自分が返せる言葉は一つしか残されていない。

「今後このようなことは、絶対に起こさない」

「お願いします。では、これは陛下に預けます……貴方の目が行き

届かない間に、何か起こらないように」

満足したのかどうなのか、相変わらずの笑顔で、フリツカーは己が首から提げていたメトリアを外し、サージに差し出した……が、それをすぐには受け取ることができなかった。

それはフリーダイルにヴェンダントの内情を盗聴する意思がないという証でも、姉姫の監視装置を手放すことによって自分に対する信頼の証でもない。己の二分の一しか生きていない、小さな、小さな王子からの痛烈な嫌味だ。自身の管理不行き届き、家臣を御し得ぬ不甲斐なさへの皮肉だった。

「……ありがとうございます」

それでも、怒りを虚脱感に変え、受け取らざるを得ないのは、此度の失態への自責の念と罪悪感……さらに、フリツカーの指摘がただの皮肉ではなく、痛いほどに的を射ていたためだ。自分には、何一つ反論することができない。

「できればこんなことを言いたくはなかったんですがね、陛下……姉の『水呪』が有名過ぎてここまでは伝わっていないでしょうが、僕はフリーダイルと取引きのある諸外国からはヒル王子と呼ばれているんですよ。獲物が干乾びるまで血を吸うヒルと、塩をかけられただけで干乾びるナメクジ……まあ、今はカサカサに乾いてただのミノムシに成り下がっていますけど、どちらが本当に敵に回すべきではないか、貴方はもう少しよく考えた方がいい」

己を見上げる双眸は柔和に笑み細められていたが、その奥に輝く瞳の冷たさに、背筋を悪寒が駆け上がる。

自分は確かに見誤っていた。本当の第一級危険人物は「水呪」の姉姫ではなく、その陰に隠れた狡猾なほどに明晰な弟王子だったのだ。

手の中で、メトリアに繋がる鎖がカチャリと音を立てる……サー
ジには、それが己の腕に容易に断ち切ることのできない手枷がかけられる音に聞こえた。

「申し訳なかった、すべては俺の責任だ」

割れた石の破片が散乱した床の上で片膝をつき、エイダンは深く頭を垂れた。

此度のことは、王ではなく自分の犯した失態……離宮の警備責任者は近衛隊長であるエイダンなのだ。

「水呪」への先入観、異様な出で立ちに、これ見よがしの力の行使初見でエイダンが抱いたアムリットの第一印象は最悪だった。一国の王女といっても礼儀作法もなっていない、とうの立った田舎娘が忌わしき呪いの力で、勇猛果敢な気高き戦士の国ヴェンダントを食い物にするつもりか、と……呪われし人間はその性根まで腐り切っている、そう思い込んでいた。実際、聡明な王をあそこまで動揺させ、心煩わしているのだから、稀代の悪女、毒婦に間違いない。

そんな勝手な思い込みのせいで、一番見落としてはならないものを見落としてしまった。

デイル・マースに住むことができるのは実質的王妃である第一妃だけで、離宮は第二妃以下の妃達の居住空間となっている。即位してまだ一年にも満たないサージには現在、第二妃までしかいないため、部屋を宛がわれているのはアムリットだけだ。呪われた人間が住まうということで大幅な改築があり、部屋には分厚い呪禁の魔法

陣の塗り込められた扉が取りつけられ、警備体制も先王の代以上に厳しくなった。それは貴人の警護というよりも、罪人の見張りのように。

離宮内には王以外の人間が出入りすることは禁じられており、異国から来た彼女に来訪者もなく、その存在を知っても不用意に近づきたがる人間など存在するわけがない。渇水対策に一応の決着がつき、今はそれ以外の止まっていた政務に忙殺されている王が訪れたのも、初日の一度きりだった。そのため、護衛に当たった隊員達から提出された日例報告書の訪問記録に、エイダンは流すようにしか目を通していなかったのだ。

まったくもって無意味と思っていた訪問記録の中、召使達の入室記録が欠落していることに、エイダンが気付いたのは今朝方だった。まさか、そんなはずはない……そう願いながら、これまで護衛の任についた隊員を呼びつけて確認するも、やはり間違いではなかった。この七日間、誰一人としてアムリットのもとを訪れていないのだ。身の回りの世話をするはずの召使達が来ていなかったということは、彼女のもとには水も食糧も渡っていないということだ。

離宮に即座赴き、封印された扉を目の当たりにしたエイダンの心臓は凍りついた。扉全体を塗り固めたカノワの汁は、城の土台造りでも使用する強力な金属接合材だ。火にも水にも強く、一度接合されれば剥がすことは不可能。叩き壊すしかない。分厚い扉は防音の役目も果たしてしまい、部屋の中の状況はまったく窺い知れなかった。

「水呪」の娘の安否は……それ以前に、その中にいるのか？

とにかく部下に扉の破壊を命じて、エイダンはサージに事の次第

を伝えるため、ファールランド神殿へ向かったのだ。

「サージ様は本当に何も知らない。責はすべて俺がとる、何の申し開きをするつもりもない」

害意を持った者の離宮への侵入を防げず、さらには扉が封印されて、意図的に召使達さえ遠ざけられていたことに、こんなにも長い間気付けなかったのは、あまりにも手痛い不手際だ。砂漠の気候に不慣れな他国の人間に水も食糧も与えずに一週間も放置するなど、その先には死しかない。普通の人間なら、確実に死んでいる。アムリットだったからこそ、こうして本人に失態を告白することもできるのだ。その点だけは、彼女が「水呪」であってくれて本当によかった。

「この首をくれてやる」

命にかかわる失態を贖うのに、己の命を差し出すしか引き合っものはない。

「誰がいるか、そんなもん」

……が、清廉な覚悟を決めてエイダンが舌に乗せた言葉は、カサカサという耳障りな紙擦れの音とともに、甚だぞんざいな台詞で一蹴された。

「あんたが死んで、あたしに何の得があるわけ？」

予想外だというように目を見開き、顔を上げたエイダンを、アムリットはしらけた目で見つめる。さきほどまでの我を失うほどの激しい怒りは、フリツカーの登場であらかた勢いを削がれ、彼の不用意な謝罪の言葉で完全に鎮火してしまった。

本来の思考力が蘇って、沸々と別の怒りが込み上げてくる。

アムリットは、「死んでお詫びを」なんて軽々しく口にする人間が大嫌いだった。相手のことを慮った最大の謝罪だと勘違いしているのかも知れないが、その根底にあるのは自分が楽になりたいという浅ましい欲求……死んで何もかもがうまくいくというのなら、自分とはとつくの昔に自殺している。迫害を受けるだけの不自由な人生でも生きているのは、これ以上周りに迷惑をかけないように必死に踏ん張っているのは、愛する家族のためだ。両親も、姉を姉とも思わない口やかましい弟だって、ちゃんと自分を愛してくれていることを知っている。こんな呪われた身の上の自分にだって、死ねば哀しむ人がいる。普通の人間なら、その比ではないはずだ。天涯孤独で家族がいなくなつて、生きている限りは誰かと繋がっている。誰にも愛されない、心配されない人間なんていないのだ。

「まーいいわ、今回のことは……あたしもうちちょっとで自分の信念曲げるところだったし」

冷静になつて思い出した……自分のせいで人が死ぬなんてご免だ。これ以上誰かが泣くのも、憎まれるのも絶対に嫌だ。

「俺を……許すと、言うのか？」

「そうは言っていない、あたしは何でも死んだら解決できるって思っているのが気に食わないって言ってるだけ。ヴェンダント人は、本当に自分に都合がいいように考えすぎよねえ……ああ、おめでたい」

しかしながら、エイダンの驚きに塗れた問いかけは、即座に否定される。頭を横に振ったらしく、てっぺんの方の呪禁符が激しく揺れ動いた。

「……俺に、どうしろとっ……？」

さきほどまでの突き刺すほどの怒気は確かに霧散していたが、そのお陰で目の前の巨大ミノムシからは、その意図が再び見えなくなってしまう。掴みどころのない、どこか怠惰な雰囲気を漂わせるアマリットに、エイダンは落ち着かなかった。

「話を聞いている感じじゃ、あんたはただの管理不行き届きで実行犯は別にいるらしいから多少は減刑する。でも、謝る態度がなっていない。この首くれてやるなんて、命さえ差し出せばいいだろってのが上から目線で気分悪い。それに、初対面から色眼鏡バリバリで、人がどれだけ呪い抑えるのに神経裂いてるかも知らないで……あー、ムカつく、ゲラムカつくつたあないらあー」

ただ、言葉を重ねるごとにだんだんとアマリットの中に過去の不快感まで再燃したようで、再びわけの分からない言葉がその口を飛び出してきた。完全に開き直ったらしい彼女は、エイダンの前でもう己を取り繕うつもりはないようだ……さらに憤懣やる方なさを表すように左右にクネクネと身体を捻じり、まじない札は盛大にガサガサと癩に障る音を立てた。

馬鹿にし切った態度に苛立ちを覚えないわけではなかったが、それを咎められる立場でもないエイダンは、小さく奥歯を噛み締めて次句を待つ。

「よし、決めた！」

暫くの間「ゲラ」だの「ズラ」だの意味不明な言葉を織り交ぜてぶつぶつ恨み言を言っていたアムリットは、ようやくそう言った。笑気を含んだ声高な言葉に、エイダンの全身に緊張が走る。

「これからひと月の間、あなたはあたしの下僕。あたしの言葉は絶対、反論は許さない……死ぬより簡単よねえ」

初めて聞いた彼女の楽しげな声は、エイダンの耳に死刑宣告よりも残酷に響いた。

「ちょっと待てっ、俺には近衛隊の仕事がっ……!!」

「離宮の警護責任者でしょ、だったら、あたしを守るってことで下僕も一緒じゃない」

「一緒にするな！ できるか、そんな無様な真似っ！」

能天気に戻り返ってくるアムリットに、エイダンは思わず声を荒

げる。

「死んで逃げようとしてる人間を殺して何の罰になるっての、あんたが一番嫌がることをさせなきゃ償いにはなんないでしょ……それとも、死ぬって言ったのも結局口だけ？ 誇り高きヴェンダントの戦士は人一人殺しかけといて、その責任も取れないんだ」

なんとも嫌悪感を増幅させるような正論が返ってきて、エイダンは絶句する。ここまで侮辱的な言葉を投げつけられたのも、無礼な扱いを受けたのも初めてだった。まさに、死んだ方がましだ。

「何よ、その反抗的な目は……そんな往生際の悪い奴にはお仕置きも一つ追加」

勇猛果敢、誉れも高き戦士の国ヴェンダントの近衛隊長として、到底譲けるわけのない要求に唇を噛んでいると、アムリットはさらに信じられない言葉を続ける。

「あたしからの命令の返事は全部『ゲス』で答えて。フリーダイルのデンボ村の方言で『はい』って意味なのよね」

「なっ………！」

「『なっ』じゃなくて、『ゲス』よ。はい、言ってみて」

「………っ」

「ゲス、ゲス、ゲス、ゲス、ゲス、ゲス、ゲス、ゲス、ゲス………」

「ゲスっ！」

筆舌に尽くし難い屈辱感に、目の前の忌々しき巨大ミノムシの姿は霞み、激しく火花が散った幻が見えた。

『ちちうえ、ははうえ、あねうえがのろわれてるってほんとうですか？』

『一体、誰がそんなことを……！』

『ハイムせんせい、あぶないからちかづいてはだめですよって』

『はわらあああつ……あん腐れ外道がらっ！』

『エレーデ、出てる、出てる、デンプ弁が……とにかく、彼はクビだな』

『どうしてですか、ちちうえ？』

『そんな偏見に塗れた人間に、お前の教育を任せるわけにはいかなからね。アムリットは確かに呪われている……けどね、それはあの子には何の責任もないことなんだよ』

『お姉様はね、呪いの被害から私達を守るために毎日一人で戦ってるの！ とつても勇敢で優しい子なのよ……どう、フリッカー？ 誇らしいでしょうっ？』

『はい！ どんなにガサガサ、ジトジトしてても、ぼくにとってはやさしくて、たのしいあねうえです！』

『それでこそ私達の息子だ、フリッカー。さて、ハイムには私が…

……』

『私から言いますわ、あなた。あの取り澄ました顔に、一撃お見舞いしたいのです！　そうでなければ、気が済みませんわっ！』

『……言葉遣いさえ丁寧にすればいいってものではないよ、エレーデ』

アムリットが呪われている事実を知ったその日から、フリッカーは姉を理由のない迫害から守るのが自分の使命だと思っようになった。誤解され易く、何でも一人で背負い込みがちな彼女のために何がしてやれるのか……フリーダイルのような田舎で何の因果かアムリットの「水呪」は村一つを水没させてしまうほどに強力だった。国中の魔術師や呪医に診せたが、効果を弱めて封じることが精一杯で、誰も呪いを解くことはできなかった。他国の高名な魔術師、もしくは聖獣使いにかかれば、解呪できるかも知れないが、フリーダイルの財力にはそこまでの余裕もなかったのだ。

十六も年の離れた姉弟だったため、フリッカーが生まれた頃には、アムリットはもう既に呪禁符に塗れた奇怪な姿で、罪人のような生活を送っていた。家族の前では特に用心しているらしく、絶対にまじない札をとらないので、フリッカーは姉がどんな顔をしているのかも知らない。片田舎ではあったが一国の王女でありながら、「水呪」であるがために忌み嫌われ、アムリットには読み書きや行儀作法を教えてくれる人がいなかった。読み書きは辛うじてできる程度、怠惰で口は悪いし、お世辞にも上品とはいえない人だ。けれど、何をするにも無気力に見せかけたその陰で、自分達家族のためにいつも一生懸命に呪いを制御しようと頑張っていることを知っていれば、

それで十分だった。

どんなに理不尽な扱いを受け、心傷つけられても、まだ他人を思い遣れる心根など、いくら勉強、金銭を積んでも手に入れることなどできない。見目麗しく、豪華に着飾った他国の王女達よりも、よほど清廉潔白で汚れない……真に美しい人間というのは、アマリットであると信じている。

帝王学、外交術を熱心に学び、弱冠十二歳にして周辺諸国からヒル王子と呼ばれるほどの政治的手腕を手に入れたのも、一刻も早く姉の呪いを解いて、一緒に暮らしたかったからだ。父王に似て恵まれた容姿も、いくらでも利用しよう決めていた。この広いエリアスルートの中で、嫁ぎ先に難渋している不器量な王女は、香彩国ホリドウラの二の姫、三の姫を筆頭に、片手にあまるほどいる。そのうちのどこかの国王を知略で陥落、王女を美貌で籠絡して、婚約してしまおう。その支度金を、他国の一級魔術師、聖獣使いをフリーダイヤルに招く資金に充当する……フリッカーがここ最近まで抱いていた野望だった。

駆け落ち同然の恋愛結婚で胸焼けがするほどに仲のよい両親を見て育ったフリッカーだったが、父が厭うた政略結婚には何の不满もない。不満どころか、結婚に対して何の期待もしていなかった。フリッカーにとつて、一番はアマリットで二番はない。ならば、結婚も姉のためにしようと考えてるのは、当然の心理だった。伴侶なども従順であればそれでいい。気位の高い美人よりも、気立てのよいブスがいいに決まっている。ナメクジ女、巨大ミノムシと呼ばれるアマリットに理想の女性像を感じているフリッカーにしてみれば、外見がどんなに美しかろうと無意味だった。隣の不細工を補ってあまりある輝くばかりの美貌が、自分にはあるのだし。

* * *

あまりにも手痛い失態を犯したヴェンダント側は、フリーダイルが提示した商談と称した損害賠償要求を呑むしかなかった。輸出に制限のあった希少な革製品における便宜に、関税の引き下げと、今までにない譲歩を勝ち取った。ホレストルを中心とした長老議会の面々は憤懣やる方なき怒りの視線を、サージャー人に集中砲火のごとく注ぎ、王の間をあとにする。

ヴェンダントでは台や机といった概念はなく、床の敷布の上に広げられた契約調印文書や、その他の資料を、至極薄暗い表情でかき集めているサージの姿は、およそ大国の王にはそぐわなかった。身分としてはそこまで高くはない第四妃の一子であった彼は、魔導石を抱いて生れ落ちたときに一度、王太子としては不適合であるという判断を下されている。だからこそ、魔法大国ガルシュへ魔導留学というかたちで、体よく追い出されていたのだ。それが、数年前にヴェンダントを流行り病が襲い、先王並びに六人の王子達がごとごとく罹患、崩御してしまつたがため、ただ一人の王位継承者であったサージは呼び戻され、王位に就いた。

臣下が従っているのは、王族の血であつて、彼という人間ではない。よそ者であるフリッカーの目にも、それは明らかだった。戦士の国ヴェンダントにおいて、ガルシュで魔導の研究に情熱のすべてを注いでいたサージの存在は異質すぎる。自分達のただ一人の王が

剣を扱えぬ学者肌の魔術師であるなどと、受け入れがたい現実だろう。青く発光する魔導石をその手の甲に埋め込んだサージは、魔導の力は二級止まりでも、大変研究熱心でガルシユ国内でもその名を知られていた。できることならば、彼自身も権力闘争や世俗とは一切縁を切り、象牙の塔に籠って魔導の研究にその生涯を費やしたかっただけに違いない。

だからといって、フリツカーはその身の上に同情することは一切なかった。最愛の姉を管理不行き届きから餓死させかけた相手に、小指の先の甘皮ほども心を裂いてやるつもりはない。

大体、大国でありながらこの国の警備体制は杜撰すぎる。明らかに人材が足りていない。誉れ高き戦士の国に攻め入る馬鹿はいないだろうが、今の状態では、万が一でも海港国リゾナあたりに海側から攻められればひとたまりもないのではないかと思う。いくら姉姫が第二妃として住んでいるからとはいえ、国王のいる離宮まで易々とフリツカー一人に侵入を許すなど、不用心にもほどがあった。今だって、御簾の外には衛兵がいるだろうが、部屋の中にはフリツカーとサージの二人だけだ。いくら身分が明らかかな自分だからといって、この扱いは頂けない。少し頭を使えばいくらでも王に危害を加えられる状況だ……そして、もし何か事件が起こったとしても、御簾に織り込まれたカギンがその事実を外に控える彼らに伝えられない。果たしてこの国は、本気で国王の身を守るうという気概があるのだろうか？

さきほどの臣下達の対応をとって見ても、いかにサージへの風当たりが強いかが分かる。彼を頂点とした現王政や「水呪」のラムリツトの輿入れに反感を覚え、去っていった者達も少なくはないのかも知れない。

そして、もしや此度の事件は、その者達の手によって引き起こされたのだとしたら……。

「サージ陛下」

そこまで考えたところで、フリッカーはサージに声をかける。さきほど脅し過ぎたせい、彼は大仰に肩を揺らした。手にしていた書類が、バラバラと床に散らばる。自分の一挙手一投足に面白いほどに反応する様はどこか小動物じみでいて、フリッカーの嗜虐心を存分に煽ってくるが、これからする要求のために、それを一時的に引込める。姉に無体を強いた咎への意趣返しはまたの機会にじっくりとすることを決め、努めて優しい微笑みを作ったフリッカーに対し、サージの表情は引き攣ったままだ。

「姉によく慣れている侍女をフリーダイルから一人寄越したいのですが、よろしいですよね？」

突きつけたのは、依頼ではなく決定事項だった。

やっぱり白身魚は、塩焼きが一番だ。

一方的に快適な主従生活が始まって、はや三日目……下僕に命令して運んでこさせたのは、大皿に盛りつけられ焼き魚だ。「わけの分からない香辛料は使つな、塩だけでいい」と言っておいたのに、目の前に現れたのは、赤だとか青だとかの色鮮やかな粉が振りかけられた刺々しい真つ黒な魚だった。

「あだつ、ゲラ嫌味つちやか！ 食いモンな恨みな恐ろしさ知らあーでかつ！」

長年使い慣れたデンボ弁で啖呵を切り、胸倉を掴みかけたアムリツトだったが、聞けばそれは色つきの岩塩だったらしい。半信半疑で口に運んでみたら、確かに塩味しかなかった。砂漠の塩湖でとれたそれを、荒く砕いて振りかけていたようだ。湖のある地層に含まれる成分がそれぞれ違うので、様々な色がついているとのことだったが、なんとも紛らわしいことである。

そして、生まれたての赤ん坊ほどの大きさのあった魚は、オルロ口というらしい。黒い鱗の内側に真珠のように白い身を持っていて、泳ぎまわって締まったその身は、とてもプリプリしていた。少し前まで硬くて単調な味の木の实ばかりで、圧倒的にたんぱく質が不足していたアムリツトにとって、五臓六腑に沁みわたる美味さだった。人間だって、どんな美女も醜女も、一皮剥けば皆似たり寄ったりの

髑髏なのだ。常々そう思っていた自分だったのに、見てくれで判断してぶち切れてしまい、甚だ申し訳ない……と、己が血となり、肉となる高たんぱく魚に心の中で合掌一礼する。

「あつ……下僕、酒持ってきてー。一番強いヤツね」

これはもう、飲まないとオルロ口に失礼だ……実に美味しい供養を思いついたアムリットは、扉のなくなった入り口前で佇立する彼の下僕に命じる。

「……っ、……」

舌打ちのような音とともに、踵を返すエイダンだったが、それで許すアムリットではなかった。

「性懲りもなく、忘れたふりしてんじやない……お返事は？」

その背中に、追撃の言葉を投げつけると……。

「……ゲスっ！」

融通は利かないが、根は真面目な近衛隊長の半ばやけくそな怒声が返ってきた。

ああ、実に楽しい。

怒り肩を震わせ、部屋を出ていくエイダンを見送るアムリットは、久方ぶりに悦に入る。鼻歌交じりに、丈夫な歯でオルロ口の身を小骨ごと咀嚼する。塩味がしっかり効いているので骨まで美味しい。

棘のある硬い鱗を残して、骨までほぼ平らげた頃に、エイダンが部屋に戻ってきた。何も言わず、肩に担いでいた酒樽を、アムリツトの前の床の上にガンッと叩きつけるように置いた。すると、彼が屈めた腰を伸ばした一瞬、鉄錆臭さがアムリツトの鼻を突く……不思議に思っ て見上げた彼の目は屈辱からか異常なほどに血走っており、強く歯を噛み締めているらしく、唇がワナワナと震えていた。今にもギリギリと歯軋りの音が聞こえてきそうだ。

悔し過ぎて、口のなか切れるくらい噛み締めちゃってるわけね。

きつと、そのうち傷口にバイ菌入って膿んじゃうね。

そんでもって、ご飯食べる度に痛さと屈辱に苛まれちゃうんだろ
うね。

自分も昔はよく作っていた口内炎……小さな傷口でも、ほんの少し舌先や食べ物がかすめるだけで悶絶していたのを思い出す。

けれど、「ざまーかんかん」とも「気の毒に」とも思わなかった。いざというときに何の役にも立たない戦士の誇りやら、古臭い矜持やらに囚われているから、痛い目を見るのだ。

下僕生活残り四十七日、高潔なるヴェンダントの戦士は、偏見という名の色眼鏡を外すことができるだろうか……。

* * *

とある側仕えの少女の告白に、サージは深いため息を吐いた。

「……事情は分かった、連れて行け」

少女の両脇に控えていた武官にそう命じると、即座に小さな身体は拘束される。

「陛下っ……話が違いますっ、私は！」

「己のしたことを考えよ、残念だが無罪放免というわけにはかない。地下牢で裁きを待て」

「そんなっ……いや、いやあああーっ！」

少女はあらん限りの力で抗うも、鍛え上げられた巨漢の兵士二人に引き摺られるようにして王の間を去る……廊下に出たあとも、しばらく甲高い絶望の音はサージの耳に届いていた。

予想以上の、大事になってきた。

一人になったサージは、再びため息を吐いた。

まだ十五にも満たないさきほどの少女が、第二妃アムリット殺害未遂の実行犯だったのだ。同年代の少女達に比べて体つきも小さく、敏捷はじこい彼女は貧民街で生まれ育った。年端もいかない頃から、スリや置き引きといった軽犯罪にその身を浸してきたために、見張りの兵士の目を掻い潜って離宮に侵入することも可能だったようだ。そんな貧民街の現状を憂い、たびたび施しをしに訪れていた貴人と出会い、縁あって側仕えとして拾われたのだという。赤子の頃にうち捨てられていたために名前もなかった彼女にそれを与え、実の妹のように可愛がつてくれた恩義ある主人の命……どうしても裏切れなかったのだと、涙ながらに訴え出たのは殊勝といえなくもない。

けれど、人一人……それも、国王の第二妃を殺しかけておいて、殊勝だからと許すわけにはいかなかった。投獄の先に待つのは、斬首刑に他ならない。

三度洩みたびれたため息は、少女への憐憫の情ゆえではなかった。

一番の問題は、彼女に命じた貴人……貧民街にわざわざ出向き、施しをする心優しき人物。

彼の人は、拾い上げた少女を捨て駒モイリと名づけ、殺人鬼に仕立て上げようとした。

サージには敵が多い。ただ王位に就いているというだけで、一日に何度も暗殺の憂き目にあっている。王宮の中にも、自身の味方の方が少ない。フリーダイルの「水呪」にかかった王女アムリットを第二妃に迎えることが決まったときも、多くの反感と怒りを被った……何一つ、己で言い出して決めたことではないというのに。無理矢理に押しつけられ、退くことの許されない砲弾の矢面に立た

される自分に、それ以上の責め苦が待っているとは思っても寄らなかつた。

先王であり、自分を切り捨てた父の忠臣達の大半は、己を王と認めず城を去っていった。此度のことは、そんな反体制の不满分子が引き起こした事件だと思っていた。そうであつて欲しいと今この瞬間にも望むのに、弱り切つた心には容赦なく鉄の爪が食い込む。

この監獄のような王宮の中で、唯一の慰めとなつてくれるはずだつた存在……強く瞳を閉じ、座して立てた膝頭に擦りつけるように顔を伏せた。

しばらくの間そうしていたあと、意を決したようにサージは立ち上がり、カギンの御簾をくぐる。表に立っていた警備の兵士は反射的に敬礼をしつつも、まだ執務時間中に部屋から出てきた彼に、訝るような視線を投げてきた。

「ついて来い……王妃の間に行く」

暗殺未遂の一件があつてから、再犯防止のために離宮のアムリットの部屋の扉は取り外されたままで、代わりに王宮と同じように戸口には魔導石を織り込んだ御簾がかけられた。静寂効果のあるカギと一緒に織り込まれた緑の輝石はアルヴァと呼ばれる魔導石で、呪いの浄化作用がある……「水呪」を相手にするには子供騙しもないところだが、魔法陣を塗り込んだ分厚い扉の中にいながらにして部屋を密林に変えた彼女に、本気で抵抗するつもりはもうなくなつたようだ。とりあえず、エイダンへ此度の失態への制裁行為をするために一ヶ月はヴェンダントを出て行く意思がないことも明らかであるし。

アムリットは今、あのあとすぐに元通りに戻された部屋の中央の円形の寝台の上で、何をするわけでもなく蹲っていた。寝台には戸口にかけられたものと同等の魔導石をちりばめた天蓋がかけられ、そこから見る外の様子は薄く緑に色づいている。

「隊長、カルナンの警備はどうしましょう」

「ザインの隊に行かせろ、グノーシスの刻からカパの隊と交代だ」

「ガンパで火災が発生しました！」

「ミロとターズの部隊を向かわせろ」

「ファールランド神殿からの使者が、この前神官と押し問答したときにぶつかって割った御神体を弁償をしろと……」

「ふざけるなっ、金で買えるような神ならそんなもの置かんでいいと言って追い返せ！」

現在、自分の忠実なる下僕であるエイダンのもとへ、多種多様な指示を仰ぎにやってくる配下の近衛隊員やらその他の武官、文官を見遣りながら、アムリットは内心首を傾げていた。実際の行動に移さないのは、少し伸びをしたときに立てたカサカサと紙擦れの音に、少年兵の一人が「ひゃいつ！」と叫んで飛び上がったせいだ。最初のうちはやけに立て込んでいるな、と思う程度だったが、八日目に至って変わらぬ現状に、疑問が持ち上がる。

大体、ヴェンダントの王宮を守る近衛隊の長たる彼の仕事としては、あまりにも雑多で広範囲だ。しかも、最後の一つは半ば言いがかり臭い。それに、報告をしにくる人種も腑に落ちない。フリツカ―くらいの年齢の少年や、見るからに三下風情……つまりは、決断力を持たない者達だ。いくら今は「水呪」の自分しかいないとはいえ、ここは城の離れに建てられた王の妃が住まう場所だ。身分の低い者は、おいそれと近づけないのではなからうか？

ヴェンダントは勇猛果敢な戦士の国なのだから、皆が皆、自分を恐れて近寄りたがらないわけでもないだろう。

「……今度は何だ？」

隊員達が敬礼して部屋をあとにすると、近衛隊長は部屋の中に向き直り、至極嫌そうに尋ねてきた。アムリットの呪禁符の下の視線に気付いていたらしい。

「随分忙しそーね、あんだ」

「……………誰かのお陰でな」

下僕のくせに、口調は相変わらず……………それでも、口内炎を山ほど作りながらもアムリットの指図に従う辺りは、己の処罰を受け入れているらしい。そして、アムリットに向ける双眸から蒸発しそうなほどに熱く燃え滾る怒りの焰は感じて、蔑みの色は払拭されていた。

「そーゆー意味じゃない」

初対面に比べれば、かなりの進歩ではあったが、アムリットが今現在気になっているのはそんなことではない。

「私が言いたいのは、人手不足過ぎることよ。大国ヴェンダントでしょーが……………仮にも」

「仮などではなく、大国だ！……………つ……………大体、貴様には関係ないだろう」

最後につけ加えた言葉に憤慨して怒鳴り返してくるが、そのあとに続く言葉はどこか歯切れが悪い。この国を襲う水不足や、その対策で呪われた田舎王女なんか頼らなければならなかったことにも関係するのだろうか？

大体、国王もおかしい。戦士の国ヴェンダントの王族は一夫多妻制なのだから、息子など一人ではあるまい。わざわざ魔術師であるサージを王に選ぶ必要などないだろうに……ついこの間までヴェンダントに流行り病が蔓延していたことを知らされていなかったアムリットは、そのことが不思議だった。

自分の歓迎の宴においても、長老ホレストルの周りには多くの人々が集っていたが、サージと主賓のはずの自分の周囲には最初の挨拶が終われば誰も寄りつかなかった。「水呪」への偏見や、婚姻関係を結ぶ二人に遠慮して、という理由かとも思わなくはないが、それにしてもおおよそ不自然な光景だった。サージに対する臣下達からの敬意が、一切感じられない……目の前の怒りっぽい近衛隊長一人を除いては。

「……陛下のどこがよくって仕えてるわけ？」

ザワザワと鳴る呪禁符の下で、疑問がそのまま口を突いて出てしまった。

「なっ……貴様！ 我が君に対して不敬なっ！」

即座に腰に帯びた剣に手をかけて、自分が下僕扱いを受けること以上の怒りに双眸を燃え上がらせる。嘘偽りない、なんとも見上げた忠誠心だ。

「はい、はい、ごめん、ごめん。言い方悪かった。なんで、陛下にはあんたぐらいしかちゃんとした味方がいないのって言いたかったの。周りが筋肉まみれだからちよっと頼りなさげに見えちゃうし、戦士の国で魔術師の肩身が狭いのは分かるけどさー、自分達で選んだ国王陛下サマサマでしょ？ あの扱いはマジであり得ないと思う

わけよ。あたしみたいな「水呪」と違って、魔導の力は神様の恩恵でしょ。この天蓋や御簾に織り込んだ魔導石には頼っておいて、人がその力を持つてたら迫害するなんて……大国の優れた人間がする行為じゃない」

しかし、続けられたアムリットの言葉に彼の怒りは薄暗い何かに取りつて代わり、剣にかけられた右手もだらりと垂れさがる。

「……部外者のお前には関係ない」

「あなた、そればかりね」

吐き出した長い吐息に、口もとの呪禁符がカサカサと揺れる。エイドン自身も自国の恥と思っているのか、気安く話せるような事情ではないのか……それでも、現状を彼が忌々しく思っていることは知れた。

何となくしんみりしてくる己の心境に、アムリットは誰にも見えない笑みを浮かべた。こんな身の上のせいで、正誤関係なく虐げられている者達には同情してしまう。もっと深く物事を考え、公平に見る目を養わなければならないと、息子ほど年の離れた弟にも諫められてきたが、長年の迫害に凝り固まった脳みそはそう簡単に切り替えられない。

その弟に連れて行かれたあと、またすれ違ってしまったサージが自分を引き留めた本当の目的は一体何だったのか……怒りの引いた頭に、そんな疑問が浮かぶ。

「サージ様は、お前に危害を加えるつもりはない」

そして、こちらは一体何を思ったのか、エイダンがそう言葉を発する。

「俺に対して憤りをぶつけるのは自業自得だ、構わん。しかし、あの方の心を煩わせるのだけはやめてくれ。ある一点において……サージ様のこれまでは、お前の生い立ちよりも悲惨だ」

「……呪われるより悲惨なことって、なかなかないと思うけど？」

真剣みを帯びた口調に茶化すつもりはなかったが、それでもアムリットはそう切り返す。自分の人生は、何かと比較できるほどに軽いものではなかった。

「サージ様は生れ落ちたそのときから、親兄弟すべてから見限られていた……家族の情など知らない。神の恩恵を受けた、ただそれだけだな」

言い返す言葉もなく、眉根を寄せる。

負の感情を見抜く目には自信がある。それに魔術師のような等級をつけるならば、アムリットは超一級の経験値の持ち主だ。今となつては、向けられる恐怖も侮蔑も挨拶のようなもの。不愉快には変わりないけれど、対峙した相手が自分を内心どんな風に思っているかは、どんなに表面上を取り繕っていても、手に取るように分かる

……あのときのサージの墓場から蘇ったような土気色の顔、注がれる血走った目からは建前、打算というような損得勘定が完全に抜け落ちていた。きつと素の状態であろう視線の中に、どうにも読めない感情が一つあった。

ああ、そうか……憧憬だ。

そんな感情を向けられたことがなかったから、今の今まで気付かなかった。程度はその比ではないだろうが、虐げられてきた者同士でありながら、家族の愛情を疑わない自分に、彼が抱いたのは嫉妬に近い憧れの情だったのだろう。

「なんか……ちょっとだけ、気の毒になってきたかな」

しばらくして、アムリットがため息のように吐き出すと、エイダンの肩から心持ち力が抜ける。言うべきか言わざるべきか、それによって自分がサージの気持ちはどう捉えるかを気にしていたらしい。

……が。

「下僕、この前の酒持ってきてー、今度は樽三つね」

次の瞬間、アムリットが発した言葉に、べたにずっこけたようにエイダンは上体の姿勢を崩す。

「……きつ、さまは真面目に話も聞けんのかっ！」

「うっさい、下僕の分際でっ……お返事！」

「ゲスっ！」

血を吐くような怒声と加減なく壁を蹴飛ばす轟音を残し、怒り心頭でも律儀な近衛隊長は部屋をあとにした。

「……駄目だ、こんなのあたしのガラじゃない」

情け容赦ない筋肉隆々成人男子の蹴りを受け止め、当然のように陥没した戸口の壁を見つめながら……彼女が吐き出した言葉の響きは、なぜだか途方に暮れているようだった。

初めてダラシアを目にしたとき、あまりの美しさに人外の存在かと疑った。

瞳目し、呆けたように立ち竦んだ自分に、まるで見せつけるように彼女をその腕に抱いた異母兄……彼女は王太子の婚約者、未来のヴェンダント王妃だったのだ。まだ自覚もしていなかった初恋は出逢ったと同時に、始まる前に終わりを告げた。

それでも、親兄弟に見限られた我が身に笑顔を向けてくれたのは今も昔もダラシアだけで、抱いてしまった想いはそう簡単に手放せなかった。異国の地で魔導の研究に打ち込んでいても、不意に窓の外に向けた目に映る宵闇の空、瞬く星々は、自分を追放した遠い祖国の彼女が見上げるそれと同じ……そう夢想することは、一度や二度ではなかった。

一体、何がダラシアの心を闇に墮としたのだろう。

ろくに会話も交わしていない自分が、ただ一方的に女神のごとく崇拜していただけで、何一つ変わってなどいかなかったのかも知れない。彼女がいまだ断ち切ることの叶わぬ長兄への想いとともに。

たおやかなその手を血で穢してまで、守りたかったのは王妃の座か、あるいは、愛した男の忘れ形見か……どちらにしても、此度の一件で十年越しの恋情は粉々に砕け散った。もはや彼女に望むべきものは何も無い。

「……………我が君っ？」

召使い達の制止を振り切り、伺いを立てずに御簾を掻き分けて王妃の間に足を踏み入れたサージに、ダラシアは何事かと声を上げる。

王妃の色である橙で統一された部屋の中央の座蒲に座っていた彼女は、相変わらず挑発的にも見える漆黒のチャルタでその身を覆い、まるで聖母のような神聖な美しさを放っていた。振り返った弾みで揺れ、波打つ暗緑色の髪もやや見開かれた双眸も、肉感的な肢体も………一歩近づぐごとに、記憶の彼方の微笑みと相まってサージの心を捉えて放さなかったもの。それも、つい一刻前までの話だった。

たおやかなる腕は、昨年産み落としたばかりの息子タグラムを、彼女の張りのある胸元に埋めるようにして抱いていた。己にまったく似ても似つかない男児の寝顔を見つめながら、サージは口角をいびつな形に引き上げる。平均的なヴェンダント人のそれとも違う、色みの薄い肌、茶褐色の髪に、今は閉ざされているまぶたの下には薄い水色の目がある。それは、黎国シツキムの民しか持たない身体的特徴。かつてのダラシアの婚約者であり、流行病で亡くなった長兄タリザード……父王の第一妃だった彼の実母は、エリアスルート最北の雪深き国シツキムの出だったのだ。

ダラシアは存命中のタリザードにその肌を許し、タグラムを身籠っていた。いまだ王太子妃にもなっていない間のこと、本来ならば到底褒められた行為ではなかったが、タリザードは王太子達の中

でも特に剣術、体術に優れ、次代の王として皆に囑望されていた人物……その血を引くタグラムと母であるダラシアは顕彰され、王子、第一妃の座を与えられた。片や強引に帰国させられたサージを待っていたのは、タグラムが成人するまでの期限つきの王の座と、臣下達の蔑みだった。

そんな屈辱的な状況において、ただ一つの希望の光になるはずだったダラシアは、いまだ亡き兄を想い続けている。在位して一年、閨で彼女が呼ぶのは異母兄の名であり、翡翠のような美しい双眸も、今なおサージを通して彼の血を映している。いつまで経っても、彼女は自分の妻になりはしない。

「もはや、私のことをそんな風に呼ぶ必要はありませんよ……義姉上」

禁忌の呼びかけにダラシアの形のよい眉は跳ね上がり、タグラムを抱く腕にも若干力が入ったようだ。

「申し訳ありませんっ、ダラシア様……！」

サージを追いかけて部屋に走り入りながら、彼女に謝意を叫ぶのは、あの暗殺者に仕立て上げられた側仕えと同じくらいの年頃の少女だった。ダラシアの周囲にも、年齢にやや幅のある側仕え達が侍っている。彼女らも貧民街で彼女が拾い上げた子供達だろう……挑むような己の視線に危機感を覚えたようで、主を守るように身構えた様子には、あの少女同様に感服した。虐げられた者の心を手にすることは容易なことではなからう。

「貴女のモイリからすべてを聞きました」

「捨て駒……？」
モイリ

反芻するように呟いた彼女の逆立てられた眉が、不可解そうに歪む。大した演技力だったが、側仕え達はそうはいかなかった。何か心当たりがあるようで、一斉に彼女らの顔から血の気が引いていた。

「人払いをしますか？ それとも、その子達にも聞かせますか……
貴女が彼女にさせたことを」

名ばかりとはいえ、この国の長たるヴェンダント王がそう続けてなお、ダラシアを庇うように傍らから離れない少女達は、見上げた忠誠心だといわざるを得ない……しかし。

「貴方が何を言いたいのか、私には分かりかねます。モイリとは、
一体なんのことですか？」

その腕に無垢な我が子を抱いて、まっすぐに見上げてくる翡翠の双眸は、サージの思考を絡めとろうというのか、こんなときにでもしつとりと濡れ輝いている。己が少女に与えた文字通り捨て駒の意の名を、人として認識していないと取れる口ぶりの何と強かなことか……誰かに寄り添ってしか生きられないたおやかな人、そう思っていた彼女は、ただ周囲にろうたけて見せかけていただけで、こんなにも狡猾であったとは。

「義姉……いえ、ダラシア。第二妃暗殺未遂の咎で、貴女をヴェンダントより追放する」

「……ふうあつ、ああああー……っ！」

言い終わるかどうかというとき、火がついたような幼子の泣き声
が上がる。

断罪の言葉に瞠目し、激しく驚いた……かに見せたダラシアの腕
に入った力のせいと、その胸に抱き寄せていたタグラムの柔らかな
肌に爪が食い込んだようだ。ハツと気付いて彼女は我が子をあやす
ように抱き直すが、部屋に満ちた異様な雰囲気にも吞まれたのか、
そう易々と甲高な声は治まらない。

「その子はこちらへっ……」

一歩踏み込んだサージの前に、今度は側仕えの少女達が立ち塞が
るように整列する。

「ダラシア様に、モイリなどという名の側仕えはいません」

丁度目の前に立つ、その中でももっとも年嵩だろう少女が、引き
結んでいた口を開いた。

「しかし、ダラシア様を陥れようとする人間には心当たりがありま
す」

「ルーフェ、貴女っ……!!」

ルーフェというらしい彼女の言葉を、渦中のダラシア自身はなぜか遮ろうとする。

「どのようなして第二妃様を襲ったのかは分かりませんが、そのような事態を招いたのは私の責任です……モイリというのは、きつと私の妹ですから」

その告白には、サージも瞠目する。ダラシアの制止も聞かずに言葉が続けたルーフェの青褪めた面差しは、確かに地下牢に投獄された彼の少女に似ていたのだ。

「なぜ、そのようなことに……?」

「あの子……フィリペは手癖が悪くて、嘔吐きで、人を傷つけても平気な子です。貧民街から私と一緒に救い出して頂いたのに、ダラシア様に恩義を感じるどころかお優しい心を裏切っただけでした。よくして頂いていたのに、王宮でも盗みを働いて、城下の闇市でそれを売りさばっていたのです。その中には、ネストスの指輪まで含まれていて……それは、ダラシア様がタリザード様から初めて贈られた大切なっ……!!」

妹の悪行を細かに列挙しようとしたところで、はたと気付いたように、ルーフェは口籠る。

「……構わん、続ける」

まさか、幼い召使いからまで同情されるとはな……サージは苦い
思いをやや硬い笑みの奥に隠し、その先を促した。

「はっ、はい……申し訳ありません。城下の市に買出しに出たときに偶然、露天商の広げた座布の上で見つけて、どこで手に入れたのか尋ねると、王宮の召使い風情の少女から買ったのだと。王宮に戻ってフィリペを捕まえて問いつめて、ひどくなじりました。あの子は泣いて謝って、夜にはダラシア様に謝りに行く約束をしていたのにつ……！」

彼女は俯き、唇を噛み締める……粗末な灰色の巻き布を強く握り締めた褐色の拳の上に、ポタポタと雫が垂れる。

「……そのまま、あの子は私達の前から姿を消しました。まさか、そんな恐ろしい所業に手を染めるだなんて」

ぐずぐずと腕の中で暴れるタグラムを抱きすくめ、その背を優しく手つきで撫でやりながら、ダラシアが言葉の続きを口にした。

悲痛なその面持ちは、本当に演技なのだろうか？

サージが抱いていたダラシアへの強い断罪の思いは、今やグラゲラと根底から揺らいでいた。

やっと、想い切れると思ったのに……否、自分勝手な積年の想いを断ち切るためだけに、彼女に汚名を着せようと躍起になっていただけなのだろうか？

モイリ……本当の名はフィリペというらしいあの少女の言葉を、

鵜呑みにする根拠はどこだ？

アムリットを暗殺して、ダラシアに何の得がある？

彼女は既に揺るがぬ第一妃の座を得ていて、タグラムも王太子として皆から認められているではないか……重責と蔑み以外に何も持たない我が身だからこそ、フィリペの証言の歪みに気付けなかったというのか。

……分からない、何もかも。

「サージ様っ……っ！」

グルグルと堂々巡りする思考の迷路に迷い込んでしまったサージの背に、野太い呼号がかけられる。何も考えず、そのまま振り返ると、そこにはひどく憤慨しているように真っ赤な顔をしたホレストルが立っていた。

「一体、どういうおつもりです！ 地下牢の騒ぎはっ……っ！」

辛うじて問いかかけの形をとった声は内包する怒りのせい、小刻みに震えている。

また、面倒なことに……底なしの泥沼にはまり込んでしまったよ

うなどうしようもない気持ちで、サージはすぐに返事を返さない。

「あの少女は一体何者ですか……何の咎あって!」

「……本人に訊けばいいだろう」

半ば投げやりになって返した言葉だったが……。

「生きておりましたらそうしまししょうぞっ……しかし、王よ! 彼の者はさきほど、牢番からすり盗った短剣で喉を掻き切り、それは叶いませんっ!」

まさか、そんな答えが返ってくるとは思いもしなかった。

まったく、ヘタレ男が……。

「……とにかくですねえっ、これで貴女の安全は保障されたわけ
っ……！」

「分かった！ 分かりましたからっ……はい、これ飲んで飲んで」

鼻水交じり、嗚咽交じりで釈明と謝罪を続ける失恋男に、アムリ
ットはチツと舌打ちしていた……もちろん、心の中で。現実には、小
刻みに震える手でサージが握り締めたカップに、呪禁符をガサガサ
いわせながらも酒をなみなみ注いでやり、甲斐甲斐しく積年の後悔
の吐露につき合ってやっていた。

なぜこんな状況に陥っているかというところ、遡ること三刻前、まだ
日も高いサスキアの刻のことだ。

例によって例のごとく、退屈紛れに誇り高き下僕に「ゲス、ゲス」
言わせていたアムリットの部屋を、死んだ魚のような目の、見るか
らに意気消沈したサージが訪れた。アムリットを意図的に餓死させ
ようとした犯人は捕まって自決し、関係者も全員王宮からは追放さ
れたからもう心配はない、と告げにきたのだ。

詳しい事情は語りたくないらしく、青黒いアケロン貝のように固く口を閉ざしている彼……普段の美丈夫ぶりは見る影もなく打ちひしがれ、何とも哀れを誘う仮初めの夫に同情した。

……なんてことは、やっぱりあり得ず、「当事者に詳細説明をしないとは何事か！」と少しばかりイラツとしてしまったのが、そもその発端であった。

『ありがとうございます、陛下。いまだ少々心細かったのですが、貴方の言葉で安心しました。ときに、随分お疲れのご様子ですね。時間は早いですが、暑気払いも兼ねて……ままつ、ご一献！』

やさぐれ、少々酒焼けした声を努めて高く、精一杯明るくして、呪禁符で隠れて見えない顔にも満面の笑みを浮かべて、もやは部屋に常備されてしまったヴェンダントー強い酒デンヴェストを突き出す……天蓋を上げた寝台縁に腰かけた自分の隣を、ポスポスと叩いて誘いながら。

当然ながら、最初は固辞していたサージだったが、心身ともにこれ以上ないくらい弱っていたのは本当らしく、アマリットへの負い目も加算されて最終的には「一杯だけなら」と、承諾してしまった。固い貝殻に穴さえ開けられればあとは簡単だ。手渡したカップは水牛の角を彫り出して作ったもの……鋭い角先は不安定で、どこかに置くこともできないそれに、あの手この手で「私の注いだ酒が飲めるのか！」といわんばかりに杯を重ねさせてしまえば、貝口がグズグズのユルユルになるまで、そう時間はかからなかった。

お決まりの戸口に佇立していたエイダンは、不安げな顔で二人を見つめていたが、サージ本人が許可したことであり、そんな立場でもないと思っているのか、結局制止の声をかけてはこなかった。祖国に戻ってからというもの、ずっと神経を張りつめてきた彼に、ほんの少しでもいいから気分転換をさせてやりたいという気持ちもあったのかも知れない。

いいあんばいに土気色の顔が赤く染まってきた頃、それとなく事の次第を尋ねてみると、彼はあっさりと話し始めた……それも、大号泣とともに。

アマリットの部屋の扉を封印して閉じ込めたのは、第一妃を陥れるために、自らをモイリと騙った元側仕えの少女だったのだ。彼女は犯した数々の悪事を棚上げして、主であるダラシアを逆恨みし、失脚させようとして此度の第二妃暗殺未遂事件を起こしたらしい。恐ろしいところは、フィリペという本名らしい彼女が立てたそもその計画が暗殺未遂に留まらず、本当にアマリットを亡き者にしようとしていたということ……そして、その目的、理由において、アマリットにも、「水呪」にも、一切関係がなかったということだ。

殊勝に告発した自分がまさか極刑を受けるなどと夢にも思わなかったのか、貧民街出身の彼女とダラシアの言質、どちらが信用されるかなど火を見るよりも明らかだというのに……それも、軽犯罪に身を浸してきた、教育を受けたことのない十二、三の子供の頭では致し方ないことだったのかも知れない。地下牢に投獄されて、拷問とその先の斬首刑を恐れて自ら命を絶つたその末路には正直同情できなかったが、後味はとても悪い。

さらに、ダラシアは自身直属の側仕えの管理不行き届きとして、第一妃の座を剥奪、王太子の息子とも引き離され、王宮から追われることになった。彼女も被害者であるために国外追放は免れたが、生家に戻ったあとは後ろ指を指されるような生活が待っているだろう。他の側仕えの少女達も職を失って貧民街へ強制送還されたし、ヴェンダント有数の豪商だった実家にも、此度の一件で今後の商売に悪影響をもたらすことは間違いない。まだ若い身空のダラシア……とても美しい容姿をしているらしいので、援助を申し出る男が現れるかも知れない。けれど、よくて後妻、悪くて慰み者だろう。何よりも、我が子を取り上げられ、二度と会うことができない身の上はどんなに辛いだろうか……本当に、後味が悪い。

こんなに不味い酒は初めてだ。

どんな酒でも酔わずに嗜むことのできる体質が「水呪」の唯一のよいところだったのに、今回ばかりはその特性は逆効果に働いている。酔っ払って、何もかも……ほんのひとときでいいから、自分の関わった凄惨な事件を忘れたかった。

「……あの人は、私の人生のすべてだったんですよ……」

そして、気が付けば、サージの告白は第二段階に差しかかっていった。

「初恋で、ただこの心にくれるだけでよかった……妻になって欲しいなんて、望んでもいなかったのに……！」

仮にも、第二妃の前で他の女への未練タラタラ話はどうか……アムリットは見えないから、と盛大に眉を顰める。自分がこんなになるまで飲ませてしまったので、仕方のないことだとは分かっているが。

「まあまあ、いーじゃないですか。一度くらいは本懐遂げたんではない？ それを心の支えに、次の想い人に出逢えるまで生きていったらいーでしょーよ」

ももとの造りがいいからまだ見られるだけで、不細工だったら目も当てられないな……そんな風にも思いながら、自働的に突き出された水牛の角カップにデンヴェストを注いでやる。

あまりにも突き出しな物言いに、エイダンがギョツとしたようにこちらを見遣ってきた。彼も、育ちはそれなりにいいらしい。

「……いいものですがっ、結局あの人は私の腕の中で死んだ兄の名しか呼ばなかった！」

やや声高に叫んだ声を追って、大粒の涙がサージの頬を伝う。

情けな……じゃなくて、まあ、悲惨か。

「第一妃様は、なぜ陛下のお兄様を？ ……死んだって、どうして」

それよりも、込み入った事情をいまだ知らされていないアムリットは、訝るような声を上げながら、ガサガサと戸口のエイダンを見遣る。サージを思い遣ってか思案顔をしていた彼は、自分の視線に気付いたようで、少しするとその視線を廊下と部屋を仕切る御簾に移した。以前、アムリットが忠誠心の理由を尋ねたときには濁したサージの複雑そうな身の上……本人から語られるのなら、それを留めるつもりはないのか。

「ダラシアは、もともと異母兄で王太子だったタリザードの婚約者だったのです。数年前にこの国を襲った流行り病で、彼だけでなく父王も他の王子達も、皆死んでしまった……だから、一度は厄介払いした私を呼び戻したのですよ」

そう一息に言ってデンヴェストを呷ったサージは、涙を引つ込めて、我が身を皮肉るような自虐的な笑みを浮かべる。

「臣下が望む王は王家の血を引く人間です……けれど、兄の子タグラムは幼過ぎて、後見人の傀儡にされてしまう。それを危惧したホルストルは、彼が成人するまでの期限付きの王に私を指名しました。ガルシユの研究院に、王家の使者だと名乗る屈強なヴェンダントの男達が現れたときは驚きましたよ。何の前触れも説明もなく、ただ祖国に戻れと言われてはね」

「そんな勝手な、……拒絶することはできなかつたんですか？」

思わず零れ落ちた問いかけに、サージは酒で濁った暗緑色の瞳を
アムリットに向けてきた。フラフラと焦点が定まらないのは強い酒
のせいかな、呪禁符の下に隠されたアムリットの双眸を探しているか
らだろうか……。

「ヴェンダントでは魔導の力を持った時点で、人格なぞ否定されて
しまうのです。再会したダラシアにも懇願されましたし……ああ、
きっと私はひどく取り乱していたから、彼女に不埒な想いを抱いて
いることが周囲には丸分かりだったでしょう。第一妃にはダラシ
アを、と突如として話が立ち上がりましたからね。魔導の研究に生
涯を捧げるつもりでいたのに、ただ一つの恋ですべてが台無しだ……
こんな称号、欲しいなんて思ったことは一度もないのに」

そう吐き捨てるように言って、サージは金冠を外し、被っていた
ガトラをぞんざいに床の上に放り出す。

「それでも、期限つきなんですよ？ 王の任期が終われば……」

とんでもなく屈辱的には変わりない話だったが、それでも一生涯
を「水呪」とともに生きるしかない自分と違い、サージにはまだ終
わりがあるではないか。自分の心に彼に対する同情を禁じることは
しなかったが、それでも救いは見出せる……足もとに転がってきた
ヴェンダント王の証に目を落としながら、アムリットは言った。

しかし、カクンツ……と、鳥が頭を突き出すように眼前に迫って
きたサージの顔は、どこか彼女の発言を小馬鹿にするような表情を
浮かべている。

「ヴェンダントには、王は生きている限り在位し続けなければなら

ないというしきたりがあります……王としての職務に重大な支障をきたすような事態に陥らねばね。時期が来れば、私は気が触れたことにもされて、退位を迫られるでしょう。誇り高き大国が、そんな自国の恥を他国に晒すと思いますか？ それに、精神疾患のある者を受け入れるような魔導研究所なぞ、ガルシュにもどこにもありはしない……残りの一生は、咎人のようにどこかへ幽閉されて終わりだ」

己を「自国の恥」と言い切ったサージの目は、アイリス人のそれよりも……深淵の闇よりも暗く真つ黒だった。

アマリットが覚えたのは既視感……幼い頃、鏡や水辺を覗いたときに見返してきた自分の双眸に、瓜二つだった。

それでも、自分は幸運にも闇の中から引き返してできることができた。呪わしい、忌わしい、蔑みの対象でしかない自分を、心から愛してくれる家族がいたからだ。

だから今まで、どうにか人生を投げずにやってこられた。

サージには、生きる活力となる温かな火種が何一つないのだ。本来なら、それに代わるべき存在であるダラシアも、死んだ元婚約者を愛したまま、彼のもとを去っていった。

サージには、逃げ場はどこにもなかった。

『サージ様のこれまでは、お前の生い立ちよりも悲惨だ』

エイダンの言葉が思い出され、彼に目をやる。まっすぐにこちらを見つめていた、鷹のように鋭い双眸とかち合った。アムリットはわざと盛大に紙擦れの音を立てて頷いてみせる。エイダンの言わんとするところは、理解した……サージの人生は、自分よりも救いがない。

そして、再びサージに向き直る。酔いが覚めかけたのか、悪酔いしたのか、それとも、アムリットの心に起こった変化のせいか……赤かった顔は、再び青褪め始めているように見えた。

唐突かつ性急に心の奥底から湧き上がってきた憐憫の情に突き動かされたと同時に、バサバサと激しく呪禁符が音を立てる。

次いで、それまでは薄暗くトロンとしていたサージの目が驚いたように見開かれ、上向いて注視したその先には……己の暗緑色の髪を騒々しく掻き回す、まじない札まみれの手があった。

二十歳を過ぎた大人の男に対して、愛玩動物のようなこの扱いはどうなんだと思わなくもなかったが、出してしまった手は今さら引っ込められない。あのフリッカーに至っても、不思議とアムリットの手を拒絶することはなかった。家族だからというのがあるのかも知れないが、頭を撫でられて嫌な気になる人間なぞいないだろう。弱っているときは、特にそう思うはずだ……きつと、多分。

「ええーと……陛下。貴方のその人となりを認めて、好いている人間がここに一人います。人生投げるのは、まだ早いんじゃないでし

よつか？」

咄嗟で考えなしの一つ前の行動を取り繕うつもりで、アムリットはそう言葉を続けた。

「アムリット姫っ……！」

……が、その言葉は放った当人の予想以上の効力を発揮する。

「えっ……？」

引つ込め忘れた手をガツシリと掴まれ、初めての彼との接触にアムリットはギョツとした。

水牛の角カップは放り出され、僅かに残った中身を絨毯の上に散らしながら、一転二転して戸口に立つ近衛隊長の足もとまで転がっていく……エイダンは咄嗟に足もとに目を落としたあと、なぜか得体の知れない胸騒ぎを覚えて、どこか異様な雰囲気を孕んだサージの背中を見上げた。

「……アムリット姫、私は貴女に今まで無体しか強いてきませんでした」

はい、その通りです……けど、この手はナニ？

「アムリット姫自身には責任のない『水呪』ばかりに目を奪われて、心優しく善良な貴女の本質を見ようとしなかった……真に大事なものは心だというのに、巨大ミノムシだなんて思っていた自分が恥ずかしいっ！」

薄ら寒い笑顔の裏っかわでそんなこと思ってやがったのか、このガキヤアっ！

「しかし、そんな貴女からここまで心揺さぶられる告白を受けるとは、思ってもみませんでした……！」

……。

……、……。

……、……、……。

「はああああっ………？」

最後の一言だけは聞き捨てならず、盛大に叫んでしまった。

「本当に申し訳ありません！ 好意を持って頂けていたとは露知らずっ………」

「そんな」とっ……！」

言っていない……そう言い切る前に、アムリットははたと気付いた。

『貴方のその人となり認めて、好いている人間がここに一人います』

直前に言った自分の言葉、アムリットはエイダンのことを示して言ったのだ。

けれど、一つだけ大切なことを彼女は忘れていた。呪禁符まみれのアムリットの顔は、どこを向いても分かりやしなのだ……助けを求めるように当のエイダンに目をやるも、彼も彼で目の前で巻き起こった急展開に、すっかりかっちり固まってしまっている。

「貴女を、フリーダイルには帰したくない」

アムリットの手を握り続けながら、サージは以前と同じ言葉をさららに強い語尾で口にする。呪禁符の下の自分を透視するような強い視線は、まるで熱に浮かされているかのようだ。果たしてそれは、酒の上での戯言か、弱っているところに心蕩かすような告白を受けて新たな恋に目覚めてしまったのか……後者であったならば、誤爆もいいところだ。

どえらいことになったっ………！

普通の婦女子であれば泣いて喜ぶだろう状況で、アムリットの脳裏を占めるのは、ただの危機感でしかなかった。

「私の、側にいてください……ずっと」

失恋の痛手を癒すのは、新しい恋。

これ以上ないくらい陳腐な定石通り、泥沼の闇の中から華麗なる復活を果たしたサージは、アムリットがまとう呪禁符を一枚残らず蒸発させてやるとばかりに熱視線を注ぎながら、まじない札ごと彼女の手を強く握り締めている。上気した頬も、何度も涙で洗われて潤んだ深緑の双眸も、数多の美女が裸足で逃げ出したくなるほどに美しく情熱的で、これほど乙女心高鳴る状況はなかなか訪れまい。

酒クサっ……！

しかしながら、正気かどうかも判別がつかない誤爆暴走男の告白に、胸をキュンキュンさせるほどアムリットはお気軽な精神構造を置いていなかった。真正面から吹きかけられる呼気に混じるデンヴェエスト臭に、まじない札の下で盛大に鼻を曲げる。彼以上に飲んでいゝる上に深酒を勧めた人間の台詞ではなかったが、甘い愛の告白に酒

臭さはあまりにも無粋だ。

とにかく、この酔っ払いをどうにかしよう……アムリットは、サージに掴まれたままの右掌を開いた。まるで蕾が開花するようにバサバサと広がり、視界を塞いだ呪禁符に、彼は驚いたように目を見開いた……が。

ピューーーーー……っ！

「ぶわっ……！」

次の瞬間、顔面に容赦なく襲いくる噴水のような水流に、アムリットの手を離してうしろに倒れ込む。寝台の縁に浅く腰かけただけだったサージは、ゴチンと鈍い音を立てて羅紗の絨毯の上、後頭部から叩きつけられた。脳を激しく揺さぶる衝撃で意識を失う手前に、彼が見たのは流星群かお花畑か……誰一人得るものない不毛な事態は、とりあえずの終結を迎えた。

「我が君っ……！」

ようやく目の前の衝撃から立ち直ったらしいエイダンが、仰向けにへばった己が王の身体を抱き起こしにかかる。力なく彼の腕にもたれかかったサージ……その目は分かりやすくグルグルと回っていた。

「タンコブくらいできてる？ ……ちょっと、やりすぎちゃったかな」

掌に残った僅かな水気を切るように右手首を軽く振っていたアムリットは、大して悪びれた様子もなく呟く。

「……………いや、これで一連の記憶が吹っ飛んでくれていれば、俺は一切の口を噤む」

しかし、彼のお決まりである「王に向かって不敬な！」という台詞が飛んでくるかと思いきや、返ってきたのはまったく正反対の返答だった。アムリットの（近衛隊長としては）理不尽な命令に諾々と従っていたときにも見せなかつた腰の引け切った表情は、直前のサージの言動にどれだけ動揺させられたかを物語っている。

エイダン……………曲がり間違つて彼女を第一妃に、なんて言い出されたら堪ったものではない。

アムリット……………誰も彼もが忘れがちだが、泉を湧かせ次第、フリーダイルに帰る決意は揺らがない。

サージのアムリットへの想いは、酒の上での戯言でなければ困るのだ。二人の思惑は全くの平行線だったが、利害だけは完全に一致

していた。

「とにかく、起こさないよう自分の部屋に連れて帰って……あと、長老呼んできてちょうだい」

「ホレストル様を？ お前……一体、何を考えている」

グニャグニャに脱力し切ったサージの身体を横抱きにして立ち上がったエイダンは、不可解そうな視線をアムリットに注ぐ。

「打てる対策は打つところと思ってるだけ、あんたにもその腕の中の酔っ払いにも悪いようにはしない。約束するから」

「……分かった」

しばらく胡乱な視線を注いでいたが、結局は頷いて部屋を出ていった。

アムリットは、声もなく寝台に背中から倒れ込む。フカフカした感触を全身に感じるとともに、身じろぐ自分に合わせて呪禁符がガサガサと音を立てた。慣れ親しんでいるはずのそれが、不協和音となって耳を刺す。決して喜べる状況ではなかったのだが、家族以外の異性と触れ合ったのも、愛の告白を受けたのも生まれて初めての経験……呪われていようが、やさぐれていようが、完全に女を捨てているわけではない。

「はぁーっ……あ、ゲスって言わせんの忘れた」

大きな息を吐き出し、再び耳を突く紙刷れの音に混じって思い出した小さな失態に、少なからず動揺している自分を自覚した。

* * *

吐き気と頭痛を覚えて目が覚める。

頭の内側、脳全体が金切り声を上げているかのように振動を続け、後頭部は熱を持ってズキズキと痛む……まるで荒れ狂う嵐の中を船出し、激しい船酔いに陥った末にマストに頭をぶつけたかのごとく、踏んだり蹴ったりな苦しみ。意識が戻っても、しばらくの間は目を開けることさえできなかつた。

……酒臭い。

嘔吐感を抑え、噛み締めた歯列の隙間から吐き出した吐息は、随分と強い酒気を帯びていた。癖の強い臭いはデンヴェストに違いなし……しかし、どちらかといえば下戸に近い自分は、酒なぞ好んで飲む性質ではないのに。

一体、自分の身の上に何が起こったのか？

サージは、痛む頭で直前の記憶を紐解いていく。

確か、自分はダラシアをアマリット殺害未遂の咎で断罪しに行つた。その先で、真実が自分の想像以上に厄介で凄惨だったことを知

らされた……咎を負うべき少女も自刃し、管理不行き届きとしてダ
ラシアも王宮を追われた。事件の終焉、積年の想いの決着は、到底
晴れやかではなかった。酒焼けしてムカムカする胸が締めつけられ
る。

事の次第はともかく、もう安全だということのアムリットに告げ
ねば……。

『ままつゝ、ご一献！』

自分を迎えた彼女……その手にしていたのは、デングエストだっ
た。

その姿とともに、突如膨れ上がってきた記憶にサージは瞠目する。
飛び込んできたのは、見慣れた天井……窓にかけられた御簾越しに
差し込む西日に、辺りは橙色に照らされていた。どうやって帰って
きたかはさっぱり分からなかったが、王の間の続きの間の寝台で自
分はひとしきりに眠っていたようだ。酒に濁った眼に映る天井に刻
まれた蔓草の文様は、まるで生きているようにグニャグニャと蠢い
て、そこかしこに明滅を繰り返す星々が瞬いている。一斉吐き気が
襲ってきたが、取り戻したそれ以上の衝撃的は、物理的な苦しさを
凌駕していた。

『私の、側にいてください……ずっと』

己が発した言葉、呪禁符越しに掴んだ細い手首……すべてが生々しく蘇ってくる。

ダラシアへの想いや己の置かれた立ち位置、溜め込んでいた諸々の憤懣を、酔った勢いに任せてアムリットにぶちまけてしまった。仮にも夫と妻の間柄で、なんと無神経な言動をしてしまったのか。

やおら自己嫌悪と名の痛みに襲われた頭に手をやると、更に思い出されるガサガサした感触……特殊加工した硬い呪禁符の角が頭皮や目を突き、柔らかかさなど何一つない手。その意図を汲み取るうにも、その顔さえまじない札の向こうだったけれど。

『貴方のその人となりを認めて、好いている人間がここに一人います。人生投げるのは、まだ早いんじゃないでしょうか？』

耳障りな紙擦れの下からかけられた言葉は、薄暗く落ち込んだ心に差し込んだ一条の光のように温かかった。素面するときなら、自分

だってここまで飛躍的な拡大解釈はしなかった……けれど、感情のたがが完全に外れていた自分は、唯一無二（と、そのときは思っていた）の温かさに極端に反応、形振り構わず縋った。アムリットは慰め、同情のつもりで口にした言葉であって、間違っても「愛の告白」などではなかっただろうに。彼女は、祖国フリーダイルの家族のもとに帰りたがっているのだし。

分かりやすく、胸がズキリと痛む。

「……フリーダイルには、帰したくない」

三度目の台詞は、かすれて情けさ全開……それでも、ずっと心の中心部に住まわせていた過去の幻影を吹き飛ばし、新たな存在を刻みつけるには十分だった。

片田舎出身の嫁ぎ遅れも甚だしい、呪われた王女アムリット。

その姿はいまだ呪禁符に覆われ、窺い知れない。

それでも、不遇な身の上に恨み事一つ言わず、ただ一人で「水呪」に抵抗する強い精神力……それを支える家族、他者に対する神聖なまでに深い慈愛の心を知っていれば十分だ。

アムリットは「人間」だ。

特別で、真の美しさを持った女性^{ひと}。

素面の頭でそうしっかりと自覚するとともに、サージは宵闇の迫り始めた視界に蓋をする。眉間にしわを寄せたのは、二日酔いの苦しみのせいではない。

酒気帯びの浅はかな告白……アムリットは十中八九、酔っ払いの戯言だと受け取っただろう。それだけでなくとも、彼女の前では今まで醜態しか晒していない。

どうすれば、それらを引っ繰り返し、この国に引きとめられるか。どうすれば、本人以上に厄介な「ヒル」の異名を持つ彼の弟王子に対抗できるか。

再び襲われた睡魔に屈服するその一瞬前まで、サージが考えていたのはその二点だけだった。

……が、彼は気付いていなかった。

彼の後味の悪い一件の他、とある重要事項を伝え忘れていたことにより、すでに底辺と思われていた新しき想い人の自分に対する評価が、地盤沈下のごとく地底奥深くに崩れ落ちることを。

照りつける太陽にも負けない滾る怒りを胸に、ホレストルは陽炎立つ熱砂を睨み据えていた。熱晶国ヴェンダントの長老議會を統べる最高議長、実質的最高指導者である彼がここまで不機嫌を露にしている理由は、今ここにはいないサージにあった。

彼が王城デイル・マースの城門前で衛兵を従え、待っているのは異国からの賓客だ。本来なら国王が丁重に出迎えるべきところなのだが、彼は今現在二日酔いで寝込んでいる。寝息に混じる独特な異臭から、第二妃に勧められたのはヴェンダントでもっともきつい酒デングエストだと知れた。成人して日の浅い青二才でもあるまいに、慣れぬ深酒で翌朝熱まで出して、一体どんな悪夢にうなされているのか……「ミノムシは美しい」だの、「ヒルが襲ってくる」だの、わけの分からない寝言を吐くばかりで、まったく使い物にならなかった。それがこの炎天下に、正装中の正装である甚だ暑苦しい緋色の長衣を身にまとい、国王代理を務めることとなった顛末のすべてだ。

戦士の国ヴェンダントの王がっ、何と嘆かわしい……！

ホレストルは遙か先に投げた視線を、忌々しげに足先の砂地に移す。王城デイル・マースの城門からわずかに離れただけのそこは、今となつては何の痕跡も残っていない。

けれど、白く煙るような水柱が轟々と天高く立ち昇る様は、この目に焼きついている。

ファールランド神殿派の人間の反対を押し切り、半ば強引に国王第

二妃として迎えた小国フリーダイルの「水呪」のアムリット王女。輿入れ当日の朝まで、わざわざ王宮まで抗議に出向いてきた神官長マイロ・ナリユーン、神の従順なる下僕である彼奴がどれほど祈りを捧げようと聖泉は復活せず、片田舎の忌わしい「水呪」の娘が地下水脈を掘り当てた。神や聖獣の神託だ、何だと並べたてて政にまで口出しをしてくる神殿、神官たちの権威は完全に地に落ちた。焼けるような熱を持った砂の下から迸る水柱を目の当たりにしたマイロの顔……焼き鏝を背中に押し当てられたような、そんな醜悪な形相が思い出され、ほんのわずかに溜飲が下がる。

あのときの噴き出した地下水は今、城の地下にある貯水槽に貯められ、生活水にも事欠く市井の者たちに定期的に供給している。切り詰めれば一月は持つだろう。ただその一月の間に雨季が訪れるという保証はない。国王よりよほど得手のある第二妃には、これからも給水機として働いてもらわねば困るのだ。王女といっても名ばかり、「水呪」のせいでもろくなく教育も受けられなかった粗野な嫁ぎ遅れ女……そんな彼女を気高き戦士の国ヴェンダントに迎え入れる決定を下したことに、一抹の不安もなかったといえは嘘になる。現れたアムリットは学がないなりに卑しい身の上をよく理解しており、大国に従順、過度な要求もしてこず、実に都合がよかった。

それでも、此度の暗殺の一件にも関係する至急の用だ、と昨日呼びつけられたときは内心冷や冷やしたものだが、その言葉を聞いて拍子抜けしてしまった。平身低頭な姿勢は変わらず、その口から出たのは要求とも呼べないなんともし細な沙汰だった。その要求を通じたとして、ヴェンダント側の腹は何ら痛むことはない。どこまでも無欲で害のない……呪わしい身の上に塞ぐわけでも自棄になるわけでもなく、何に幸を見出して生きているのか、と首を傾げたくなる。

しかしながら、本当に厄介なのは、フリーダイルの弟王子と交わした約定のこと。その年で、そんな小国で、と惜しむほどの才気を持つフリツカー王子は素早く的確にヴェンダントの窮状を見抜いた。もともと片田舎の小国には過ぎるほどの見返りを提示したものの、いくらでも足もとを見ることはできた。それなのに、彼が望んだのはただ一つの確約。

『「水呪」を次代に継承させたその後は、即刻離縁して姉をフリーダイルに帰して下さい。貴方がたが欲しているのは「水呪」の力であつて、学もなく作法もまるでなつてない片田舎の王女ではない…：期限は一年、大国ヴェンダントなのですら至極簡単な話でしょう?。」』

懐妊により「水呪」をその子に受け継がせた後、用済みとなった姉姫の返還要求を受け入れること、それはヴェンダントにとつても願つてもない、至極簡単な話だ。「水呪」を失つた、彼いわく「学もなく作用もまるでなつていない」娘に、一体どんな価値を見出しているというのか。あれだけ聡明な王子だ、ただ単純に肉親の情に流されて、というわけではあるまいに…：頭は悪くないが、学者肌で帝王学に疎いサージ、剣が振れずとも、せめて彼の王子ほどの才気があれば、ここまで臣下から軽んじられることはなかっただろう。いまだ第二妃と褥をとみにできず、国王としても男としても、何とも役立たずで困る。

「ホレストル様、あちらをつ……」

うしろに控えた衛兵の一人が発した声に、ホレストルの回想は中断される。俯き加減だった視線をあげれば、無風状態の砂漠の遙か彼方に一陣の砂埃が立ち込めていた。

「おお……やつと来たか」

ホレストルは嘆息を吐くように呟き、襟を正した。もはやこれ以上の失態は犯せない、眉間に微細な皺を刻む。

迎えるのは、彼のフリーダイルの人間……フリッカー王子が姉姫付きの侍女としてヴェンダントへ寄越したのだ。第二妃付きとはいえ、たかだか使用人をこのように大仰に出迎えることになったのは、一重にヴェンダント側の不手際のせいだった。貧民街の小娘が身勝手さゆえに引き起こしたアマリット姫の暗殺未遂事件は、彼女がそれと知らずに所持していた魔導石メトリアの通信機能を通じてフリーダイルの王子にその一部始終が漏洩していた。このような事態が起こることを見越していたかどうかは不明だが、小賢しい彼のことだ。きつと、その顛末は記録しているだろう。取るに足らない小国と勇猛果敢な戦士の国の立場はただの一週間で逆転してしまった。

砂を切るように進み、特實待遇の侍女をデイル・マースに運んでくるのは砂上船……並みの魔導石よりも希少な化石燃料を動力源とするそれは、王族でも滅多に使わない。

その名の通り砂漠を滑るように進む水陸両用の船は、ヴェンダントが海港国リゾナと袂を分かつ以前、エリアスルート的大海原を支配した海賊時代を彷彿とさせた。徐々に姿を明らかにするその船は、かつてのような木造ではない。砂を避けるために鋼の装甲で覆われ

た外形は海鳥のような優美な曲線を描いていて、船首に刻まれているのは水属性の聖獣レディオルの彫像だ。陽の光を受けて輝く流線型の身体は鱗に覆われ、視界の広そうな飛び出した目は血のように赤く、大きく開いた口には鋭い牙が乱立している。手足に近い四つのヒレには三本の鉤爪があり、胸ビレは威嚇するように立ち上げられていた。何とも禍々しい姿だが、その恐ろしい姿で海上での災厄を払うといわれており、今も昔もヴェンダントでは守護獣として、数多くの船が船首にその姿を刻んでいる。

「ゲラあつじいならあーっ！ ジッリジリおっさんだらあー、ふっかあいつちゃんदैいいらあーんなあ」

王城デイル・マースの城門前で静かに停止した砂上船の中から聞こえてきた声に、ホレストルのいかめしい顔が引き攣る。

これは、まっこと我らと同じ人間の言語なのか？

一歩前に出たホレストルが慇懃に歓迎の言葉を口にしようとした途端、水分の蒸発し切った音が紡いだ意味不明な呟きに待ったをかけられた。

航行中は装甲の下に収納されている階段状の可動橋が降り、ゆっくりとステップを下りてきたのは、甚だ奇妙な物体だった。日よけのフードで完全に隠れた顔は窺えず、丁度耳があるだろう辺りから

赤茶色に白が混ざった三つ編みの髪が左右対称に突き出している。その身にまとった茶褐色の薄い生地の外套は等間隔にひだを縫いつけているような外形で、その下からはまたしても一本の三つ編みが尻尾のようにピヨピヨと見え隠れしていた。前のめりに丸まった身体は何度もお辞儀をするようにユラユラと心許なげに傾ぎ、その度に外套のひだや触覚、尻尾のような三つ編みが揺れる。

「あんのいずったらかっていやーて腰っこいでえ……、……ゲス、ゲス、ゲス、ゲスったらーゲスっとあー」

そして、不満そうな声とともに、外套の下からはバキバキと薄気味悪い音も立てていた。

巨大フナムシっ……！！

ホレストルの顔は一瞬にして青褪め、鉄槌の一撃さえ耐え抜きそうなほどにカチンコチンとその場に立ち竦んだ。

「バッチャなあ長旅あこたえっであーよ……、……んにゃい？」

彼いわく巨大フナムシはさらにブツブツ呟いたのちに垂れた頭を上げると、ようやく己の身体に影を落とす仁王立ちの存在に気付いたようだ。ホレストルのうしろに控えた衛兵達も、呪わしい第二妃を超える未知なる存在との遭遇に度肝を抜かれ、彼の異変にも気付

「こんゲラ遠おらどこよー来たつちやらー、バツチャ……腰つご痛がねえら？」

「ゲス、ゲスつ……がつちや、アムさらあー、あんの船つご乗んごこつゲラ悪あーてら、いつでえならー」

「はらあ、船つごお？ リヤントじゃねらさか？ あん首つごなんげえら馬らみてえらやつさー。わらさそら乗つちやし」

「はららあ？ バツチャら、リヤントなんら知らねさらつす。砂ら上ら走つちやら船つごらあよー、椅子つごさかつてえぐつてらあー」

「……こんの、ボツコンガン又つ……下僕らくさつしら、わらさムゲったならー」

「アムさらあー！ お妃いさらんなつちやんにいそんらくつちやきけらんなーつ……、……むへらはうあああつ！ 腰つごにいっ、いでいでいっ、いでいでいでいでいっ」

「バツチャつ！ 年ちやらなぐゲラ声出すつらきにつ、……すつらよごなつてら！ わらさ、先に聞いとらば、こんなとつさごねでよがつたにらー」

何のことだかさっぱりである。

その怪奇的な見目と相まって、ガサガサ、サワサワと目の前で繰り広げられるミノムシとフナムシの会話は、さながら異次元世界の出来事のような。エイダンは自分の目と耳がどうにかなくなってしまったのではないかと、少々自信を失いかけていた。

今朝方、フリーダイルよりアムリット専属侍女がやって来た。

例によって例のごとく、慢性的な人手不足で連絡体制が機能していなかった王宮から離宮にその事実が知らされたのは、まったくの偶然で前日、別の用件で呼び出したホレストルの口からだ。サージとしては、到着前日に暗殺事件の顛末と一緒に告げるつもりだったらしい。エイダンも知ってはいたが、王を差し置いて先に告げることはしなかった。ただ、アムリットに勧められるままに強い酒を啣り、したたかに酔っ払ってしまったのは不測の事態で、サージだけでなくエイダンの頭からも、そのことがスッポリ抜け落ちてしまったのだ……アムリットにしてみれば、そんな事情など知ったことではない。

『それでも前日ってのはひどすぎ。謝りたいってのはいいけどさー、そんなことよりまずそっちの連絡のが先でしょ。あんたもあんただし……あああああーっ、ゲラむかつくー!』

寝込むサージを叩き起こし、文句をいうと息巻くアムリットを、

エイダンは辛くも制止することに成功した。ガサガサと呪禁符を震わせ、ただでさえ酒焼けした声が発したドスのきいた言葉に感じた戦慄……誇り高き近衛隊長の自分が、その場に土下座しそうになった。己の過失やその他諸々のいわれのない冷遇への申し訳なさが一切なかったとしても、彼女に逆らうべきではない。自分にそう告げるのは戦士の本能か、無理矢理植えつけられ、うっかり芽吹いてしまった下僕意識だろうか？

後者であつたとしたら、とてつもなく切ない。

「その下僕！ ぼーっと突っ立ってないで、さっさとバッチャの腰揉んで！」

とてつもなく切ない……。

* * *

舗装された石畳の道を過ぎ、久々の大地を踏み締めた愛馬は一瞬

歩みを止める。何事かと目をやれば、土が随分とぬかるんでいた。見上げた空は晴れ渡っているも、国境で旅券に許可印を押してくれた管理官が、ここ十日余り王都周辺はひどい雨だったと言っていたことを、ホリドウラの行商人ラルゴは思い出す。

香彩国ホリドウラから漆国アイリスまで、点在する諸国では仕事の期日の都合上、十分に休息を取ることができなかった。二十年來の付き合いがあるしよぼくれた連れ合いは、この長旅が自分以上に堪えていたのだ。

「ようし、ようし、ムンク。もうちつとだけ我慢してくれや、あとちつとでちゃんと休ませてやつから……ここで最後だからよう」

薄汚れた灰色の毛並みをワシヤワシヤと撫でさすって、何とかご機嫌をとる。不満げな響きの嘶きを漏らしながら足踏みしていたムンクだったが、長い付き合いからラルゴの気が変わらないことを悟ると、ノロノロと前進を始めた。

土砂降りの雨に掘り返された地面は平坦とはいえず、避けようのない水溜りを踏む湿った足音が一刻ほど続いた頃だろうか……ラルゴはようやく目指していた場所にたどり着いた。

「よお頑張った、頑張ったなあ」

濃い緑の蔓草を絡みつかせた門扉の前で愛馬から降りると、人間がするため息のように深く息を吐き出した彼の頭を、再びガシガシと掻き回して労ってやった。門扉の向こうに見えるのは乳白色の小奇麗な屋敷で、祖国にあるラルゴの家比べて二倍ぐらいの規模がある。一介の行商人と比べること自体おこがましいが、住んでいる人物の立場を考えれば、随分とこじんまりしているように感じてし

まい、ついつい比較してしまったのだ。

あの婆さん、ほんとに知り合いかねえ？

敷地面積、建物規模は小さくても、手入れの行き届いた瀟洒な豪邸を目の前に、彼はそう首を傾げてしまう。ホリドウラから隣国フリーダイルに商品を卸しに行ったのは五日前のこと……市場で馴染みの露天商との雑談で、これからアイリスまで足を伸ばすんだ、と話していたところ、風変わりな人物に声をかけられた。えらく訛りの強い言葉を同じ村出身の露天商に通訳してもらえば、アイリス在住の知り合いに手紙を届けて欲しいという依頼だった。

背丈は中肉中背のラルゴの胸ぐらいで、腰が曲がった体型としわがれた声から老婆のようである。段々畑のような奇妙な形状をした茶褐色の外套で全身を覆っていて、確認できたのは白髪交じりの突き出た三つ編みだけだった。明らかに怪しい風体だったので、彼としては正直断りたかったのだが、老婆が差し出してきた前金は十ラシクル銀貨……ラルゴのひと月の商売に当たる。馴染みの露天商とも知り合いだっただことも後押しし、彼は結局その依頼を受けたのだ。

ラルゴは一つ嘆息すると、ムンクの尻に括りつけていた麻袋の紐を解き、中から薄紫色の組み紐で束ねた巻紙を取り出した。蔓草に覆われた門扉中央には、藍色の石が埋め込まれている。通信機能のついたそれは魔導石で、貴族や豪商の邸宅では呼び鈴代わりに使われている代物だ。

『行商人風情がこんなところまで何の用だ、道に迷ったわけでもな

かろくに』

「ひゃあっ……つとあ、げえっ！」

楕円形の石に顔を近づけたところ、鋭い発光とともに石からそんな声がしたもので、ラルゴは叫んで飛び上がった。その拍子に持っていた手紙を落としかけ、ラルゴは咄嗟に胸に抱え込む……が、踏ん張った地面には水溜りができていて、綺麗に滑って尻もちをついてしまう。

『そこまで驚くことはないだろう……ここは誰の屋敷だ？ 分かっ
てやって来ているんだろう？』

石はチカチカと点滅を繰り返し、彼の醜態一部始終を間近で目にしているように、機械音じみた男の声色には、どこか笑気が混じっていた。

「お、おれ……いや、ワタシはっ、フリーダイルから手紙を届けに
っ……」

『……フリーダイル？ あの山陰の小国か？』

「エグゼヴィアからだと伝えれば分かると聞いてます！」

訝るようだったそれまでの音声が、ラルゴが次に発した言葉に一時途切れる。

『……それか』

そして、再度石が喋ったと同時に、彼が抱えていた手紙がヒョイと浮き上がった。驚いてその行方をただ見守っていると、明滅する魔導石に吸い込まれるようにして消えた。

『遠路はるばるご苦労だった。これはここまでの駄賃だ、汚れた服でも買い替えるんだな』

水溜りの上に尻もちをついたまま呆然としているラルゴに、そんな劳いの声かけられる。

そして、何もなかった空間から小さな皮袋が現れ、ゆっくりと落ちてきた。硬貨がぶつかり合うように、チャリンと膝の上で音を立てる。袋の大きさの割に、ズシリと重いのは中に入っているのが安いエスクド硬貨ではないという証だ。

「あ、あつ……ありがとうございますっ！」

長旅の疲れも吹っ飛んだようにたちまち立ち上がったラルゴは、何度も何度も魔導石に向かって頭を下げ、愛馬ムンクとともにその場をあとにした。

『……あの魔女、フリーダイルなんぞに隠れていたとはな』

ラルゴを見送るように暫く点滅を繰り返していた魔導石が最後に吐き出したのは、吐き捨てるような苛立ちを含んだ、はっきりとした人の声だった。

「本当に申し訳ありませんでしたっ……！」

金冠で留められた黒と白の縞模様のガトラという布は、唯一無二の王の証……ヴェンダントの象徴ともいえるそれが地べたに沈む様を目にしたのは、今回で何回目だろうか？

あの悪夢のような酒盛りから二日後に熱が下がり、起き上がれるようになったサージは、取るものも取り敢えず離宮のアムリットの部屋を訪れた。入室の許可を受け、御簾をかき分けて中に入ると同時に、彼は己が失態を全力で詫びるのだが……仮にも国王が土下座とはいかがなものなのか。そうそう見られるものではなく、正直見なくなかったのだが、留める間もなくその体勢を取られてしまい、エイダンはサージの斜めうしろから眺めていることしかできなかった。

初対面からひと月と経たないというのに、誇り高き戦士の国ヴェンダントの国王、近衛隊長そろって「水呪」のミノムシ王女に対し、今や絶対服従にほど近い感情を植えつけられている。

「謝ったら何でも許されると思ってたら大間違いですよ、陛下」

大国の王の土下座を目の当たりにしても、アムリットの返した言葉はにべもなかった。彼女にとっては、暗殺未遂事件よりも今回の連絡未達事件の方が許せなかったようだ。

弟王子フリッカーがフリーダイルから寄越した「水呪」によく慣れた侍女というのは、何と齡百歳を超えた老婆だったのだ。当然ただの年寄りでも巨大フナムシでもなく、アムリットが「水呪」を抑制するために身体中に巻きつけている呪禁符の考案者であり、フリーダイル唯一の呪医だった。その実績と、アムリットの母で現王妃であるエレーデとも同郷で旧知の仲であったことから、生まれながらに呪われた王女の名付け親とともに侍女を務めることになったのだ。ちなみに、バツチャというのはフリーダイルのデンボ村の方言で老婆という意味で、本当の名は別にあるらしい。

知っていて黙っていた罰だ、とアムリットに命じられて半日余り長旅で痛めたバツチャの腰を揉まされていた最中、本人から聞かされた話だ。あまりの方言のきつさに何を言っているのかエイダンにはさっぱり分からなかったのだが、そこはアムリットが同時通訳してくれた。二人の意思疎通はすこぶる良好で、アムリットが激昂したときに「ゲラ」だの「ラー」だの捲し立てるのは、両親よりも身近で世話してくれたバツチャの影響だったのだ。

それにしても、さすがはアムリットを育てた猛女である。寝込んだ王に代わって出迎えをした長老ホレストルも、完全に白旗を上げたようだ。異様な出で立ちに呑まれ、引きつれた衛兵ともども立ち竦んでいたところに飛びかかれ、彼は泡を吹いて卒倒したらしい。いまだにそのときの恐怖が尾を引いているようで、サージと入れ替わりのように寝込んでいる……ヴェンダントきつての猛者、戦士の中の戦士と謳われていたホレストルが実は大のフナムシ嫌い、船にも乗れないということがバツチャの来訪で白昼の下に晒されたのだ。祖先に海賊を持つこの国で、長きにわたりよくも隠しおおせたものである。

そして、よくもサージをそこまで軽んじられたものである。フナムシ嫌いが罪だとはいわないが、己の出自に泥を塗るような弱点発覚に、ホレストルの戦士としての誉は間違いなく失墜した。

ここに来て、エイダンは思い知る。

弱小田舎国家と侮るなかれ、恐るべきフリーダイルと。

「すぐにフリーダイルに帰して下さい」

地を這うような重低音を耳にしたサージは、弾かれたように顔を上げる。うしろに立っているいろいろ生真面目に思い悩んでいたエイダンからは見えなかったが、蒼褪めた彼の顔は今までにないくらいに切羽詰まっていた。

「この失態を贖えるなら何でもします！　どうか、国に帰るなんて言わないで、私に挽回の機会を……」

「えっ……ちょっと、縋りつかないで！　わわわっ、どこ触ってっ……！」

まさに形振り構わずといった様相でアムリットに縋りつくサージに、エイダンは不敬ながらため息を禁じえなかった。

「貴女が好きなんです……私にはもう、貴女だけなんです！」

「はんらまあ……お妃いさら、ゲラめぐらっせらたらあー。ゲラヌワンコなんだんさあでらいにいー、にびゃびゃびゃびゃっ！」

「バッチャっ、笑いごとじゃない！」

アムリットの通訳なくしても、何となくバツチャの言いたいことが分かる気がする。

また一つ気苦労が増えた。

深酒が見せた幻想、あのときの衝撃で忘れてくれればと思っていた彼のアムリットへの思慕の念は、残念ながら本物だったようだ。

* * *

そこは漆国アイリス唯一の聖獣使いの住まう屋敷……鳶の絡まる門扉の前に、旅装束のうしろ姿を認めると、来訪者である聖獣使いと旧知の王宮付き魔術師は眉を顰めた。

「イグナシス」

訝るような声音で呼びかけられて振り返った人物は、随分前に壮年期を過ぎていくというのに相変わらずの美貌を誇る聖獣使い。それでもフードの下に覗く銀の髪にはわずかに白髪が混じり、長い年月で培われた英知を閉じ込める薄紫色の双眸、穏やかに弧を描く口もとにも、隠し切れない老いが刻まれている。黒髪黒目しかないアイリスにおいて異質な色彩は、翔国オルガムからの移民だった祖先の血が色濃く現れたせいだ。

「これは、殿下……」ご機嫌麗しゅうございます」

「やめよ、わざとらしい。大体、今さらその呼び方はなかるう」

己の姿を確認すると、まるで貴婦人のように優美に頭を垂れたイグナシスに、この国唯一の一級を持つ魔術師にして、現アイリス国王の従兄弟でもあるセオドル・カルナン公爵は不快そうに吐き捨てる。

「これは失礼を、カルナン様。懐かしい人物からの便りに、昔に立ち戻っていたようです」

「懐かしい人物？」

確かにどこか遠くを見ているような表情の彼に、カルナンは復唱する。

「ええ、……エグゼヴィアから。これから彼女に会いに行くところです」

その名を口にしたとき、イグナシスの眉根に力が入ったように見えた。それも一瞬のことで、笑み細められた双眸は、本人以上に驚いたカルナンの顔を静かに映し込んでいた。

「……五十年も経って、今頃どうして」

「四十八年です、カルナン様。火急を告げる事態で、どうしても私の手助けが必要なんだそうですよ」

「五十年も逃げ回っておいて、随分と都合のいい話だな」

「だから、四十八年ですって。ボケたんですか、カルナン様……私よりも若いのに、お勞しい」

無然として吐き出せば、イグナシスは相変わらずの人を食ったような笑みで結構な暴言を返してくる。仮にも王族に対して何とも無礼な物言いだっただが、生き写しとまでいわれる曾祖父に内面まで似通っているらしい彼の毒舌は今に始まったことではない。権力に媚びないその姿勢はむしろ好ましいし、そのことをカルナンが過度に気にすることはなかった。

「まあいい。エグゼヴィアは今どこに？」

「ヴェンダントだそうです。アイリスも大概ですが、また暑苦しいところに隠れていましたね」

「ヴェンダント……また厄介な」

イグナシスの言葉に、カルナンの表情がにわかに難しいものになる。

「代替わりしたばかりのサージ王は一年前までガルシユの魔導研究所にいた魔術師で、少し前にフリーダイルから迎えた第二妃は「水呪」を受けているという噂だ。戦士の国で一体何が起きている……どうにもきな臭い」

「確かに情勢は穏やかとはいえませんが、エグゼヴィアがそれに関わっているとは限りません」

カルナンは、フードの影が落ちる薄紫の双眸を見つめた。その目に宿る感情はとても分かりにくい、生まれたときから傍らにいた自分には手に取るように分かる。

「……行くんだな」

「ええ、何があってもアイリスに被害が及ぶような下手は打ちませんからご安心ください」

「聖獣使い相手にそんな心配はしない」

イグナシスとは今でこそ外見上そう変わらないものの、カルナンが物心ついた頃に彼はもう成人していた。成年期の長いオルガイム人である上、老いの遅い特性のある聖獣使いであつたためだ。家族ぐるみの付き合いはイグナシスの曾祖父の代からで、彼はかつてその身に雷龍さえ宿したとされる高名な聖獣使いだった。前の戦争も経験し、なんと二百歳近く生きたという。本来、聖獣使いの素養は遺伝するものではないが、そんな曾祖父に畏敬の念を抱いたイグナシスは聖獣使いの道を選び、努力の末に聖獣から魂の器として認められたのだ。

尊敬する曾祖父の足跡を辿るように、イグナシスはその生涯をアイリスのために捧げてきた。望めばすべてを手に入れられる立場にあるのに、実に無欲で質素堅実に生きる男だった。金も地位も、色恋まで興味がなく、孤独に暮らす彼は一体何を楽しみに生きているのか、と周囲は常に羨望と失意を覚えていた。そんなイグナシスの心に唯一影を落とす人物がいるとしたら、エグゼヴィアを置いて他にない……カルナンはそのことを知っている。執着というよりも、痛みほど近い後悔の念に本人が会いに行くと決めたのなら、友人といっても結局は他人の自分に口出しする余地はないだろう。

「ヴェンダントまで転送陣で送るか？」

「いいえ、それはあまり賢くない。ヴェンダントで魔導の力は警戒されますからね……今回はこちらを使います」

頭を振ったイグナシスの背から一陣の風が起こった。己の顔を風いだ柔らかな空気の流れに、カルナンは目を細める。イグナシスの背には、オルガム人の最大の特徴である純白の翼が広がっていたのだ。

「たまには使わないと、錆びついてしまいますからね。レジストー
ルも使えば、二日程度でしょう……長居はしませんよ、ここで会わなければ貴方にも告げるつもりはかなったんです。十日ほどで戻ります」

「聖獣使いがわずかに不在になっただけで立ち行かないほど、アイリスは脆弱ではない……今度こそ決着をつけてくるといい」

「……ありがとうございます」

早く行け、といなすように手を振ったカルナンに彼は謝意を告げると、その場で地を蹴り、大きく翼を羽ばたかせる。高く上昇する身体は悠然と宙を駆け、その姿は瞬く間に視界から消えてしまった。

「何も起こらねばよいのだがな……」

一人取り残されたカルナンは、どこか予感めいた想いを呟いていた。

「ゲス」

「それはあんたもう知ってるでしょ……返事よ、返事。はい、うん、へー、ふーんとか」

「ゲラ」

「すごい……いい意味でも悪い意味でも使うわね。それだって大体わかんでしょ、よくあたしが使ってたから」

「又ワンコ」

「美形とか、美人とか……ちなみに、ブサイクはボコペン」

「ギヌ」

「……うーん、頭がいいとか、有能とかかな。あたしにはそうは思えないけどねえ」

「ヤツホイ」

「感動とか興奮状態を表す言葉で、大体単語の最後につけたりするかな。『へボ豆ヤツホイ！』みたいな使い方よ……へボ豆？ フリーダイルの特産品で一粒が拳ぐらいある豆なの、へボって人がデンボ山で温泉掘ってて偶然発見したからへボ豆。茶色と白の縞模様で左右にヒゲ根が生えてて、パッと見フナムシに見えるけどどんな料理に入れても美味しいのよ。育てるのが難しいから、お百姓さん達

は無事に収穫できると嬉しくて『へぼ豆ヤツホイ!』って言いながら踊り狂うわけ。ウゲウゴガルの実と一緒に半日煮込んだスープとかゲラウマ、久々に食べたくなってきたなあ……はあっ? わーかってるってっ、間違っても長老に送りつけたりしないわよ、もったいたい!」

単語を読み上げていたエイダンはそこで一旦言葉を切り、大きなため息を漏らす。以前のホレストルが目の当たりにすれば「職務怠慢、何たる不敬!」と、また殴り飛ばしてきそうだが、例の一件以降、もはや何が起ころうと彼が離宮に寄りつくことはないだろう。

「つまり何か……バッチャ、お前の侍女がホレストル様を見るなり奇声を発して飛びかかったのは、あの方の勇壮な姿を一目で気に入り、興奮のあまり抱きつこうとしたと?」

手元の書類に書きつけた単語と意味を繋ぎ合わせ、そのときの状況と照らし合わせた結果、彼はアムリットに向かってそう問いを投げかけた。

「バッチャは筋肉バカ……じゃなくて、筋肉質な男に弱いんだよねえ」

彼が解読しようとしていたのはアムリットの祖国フリーダイルのデンボ村の方言で、手に持った紙に書かれていたのは、ホレストルとバッチャの初対面の場で彼女が喚いた言葉の一部だった。エイダンは此度の事件の顛末書を作成するため、惨劇の場に居合わせた衛兵達に聞き覚えている限りの言葉を書き出させていたのだが……。

「嘘をつくなっ、嘘を!」

「あたしだってねえっ、嘘ならもつとマシな嘘つくわよ！ あんた、年寄りには恋しちゃうダメってのっ？」

「老人にも程があるだろう！ 百を越えて何をそんなに盛るかつ！」

「今一番盛って困ってるのは、あんたんこの王様でしょーが！」

ひとしきり醜い応酬が続き、グツと返答につまづいたのはエイダンだった。

「大体ねえ、今さら長老の権威なんて馬鹿馬鹿しいもん気にしても無駄よ。泡吹いて倒れたんでしょ、あの爺さん。その腹いせに厳しい罰をつけていうなら、十分バツチャも受けてるわよ」

「あれの、どこがっ……！」

エイダンは手にした書類を床にたたきつけ、アムリットのうしろにある寝台の上で寝ているバツチャを指差してがなつた。主の寝床でフナムシならぬダンゴムシのように丸まって高いびきをかいていられるだけでもいかなものかと思うが、これだけの激しい口論を間近でされていてもスコンと寝ついたままに目を覚まさないのは、年のせいで相当に耳が遠いのか、神経が恐ろしく図太いのか……エイダンは絶対に後者だと確信している。フリーダイル人は異常人種ばかりだ。

「一目惚れした相手に抱きついたら、悲鳴上げてぶっ倒れられたのよ？ ああ見えて乙女な心を持ち続けている可愛い女なの、バツチャは。今回のことで完全に心折れちゃったわよ、昨夜は遅くまでやけ酒付き合ってたようやく朝方に寝たとこなんだから……いい加減、外見で判断すんのやめたら？ あたしのときにそれで散々失態重ね

たでしょ、ちよつとは学習してよ。そんなだから脳みそ筋肉パツパラパーって言われんのよ」

「そんな程度の低い暴言なぞ吐かれことないわ！」

「あーごめん、あたしが頭の中で言ってたんだった。程度低いもんでねー」

「うがーーーーーっ！」

誇り高き下僕の気苦労は続く……。

* * *

王の間では、サージがいつになく熱意を持って政務に勤しんでいた。羅紗の敷布の上には、彼を取り囲むように書類が積まれている。座しているサージの被ったガトラが辛うじて見えるくらいにうずたかく積上げられたそれにも、彼の高揚した気が削がれるようなことはなかった。

通称フナムシ事件が尾を引いているようで、ホレストルは今日になってもいまだ王宮には出てきていない。形ばかりの承認を得るために、日に何度も現れて口やかましく軍事費拡張だ、なんだと熱弁をふるう彼に辟易していたサージにとっては、またとない幸運だ。

今のうちに雑多な書類を片付けて離宮のアムリットののもとに赴き、底抜けに転がり落ち続けている好感度を回復させなくては……夢も希望も奪い去られ、灰色の監獄に押し込められて飼い殺される運命にあった自分にとって、彼女はただ一人の生きがいだ。この上、アムリットにまで見限られてしまったら（すでに見限られている気もしくもないが）自分はもう立ち直れない。比較するつもりはないが、そんな想いは初恋の相手で、この腕にも抱いた元第一妃であるダラシアにも感じたことはなかった。

意外なことに、恵まれた外見を持つサージの恋愛経験は驚くほどに少ない。ガルシユの魔導研究所での研究員時代には少なからず誘惑もあったが、当事は初恋を引きずっており、ダラシアを越えるような相手は現れなかった。想いを吹っ切るために誘惑に乗ってみても、そんな関係が長続きするわけもなく、自分は恋愛だとか人と深い関わり合いを持つには向かない性質だと思うようにもなった。ヴエランダントに戻ってそのダラシアを妃に迎えるという奇跡を味わっても、結局心は手に入らなかったし、自分の人生はそんな不毛な思いの連続なのだ実感した。

そうしてすべてを諦めたサージの前に現れたアムリットは、どこまでも不幸な身の上にも関わらず、真つ当な「人間」だった。みずからには責任のないことで虐げられてきたというのに、蔑まれた上に利用されているというのに……それを分かっていたいながら、虐げた相手にすらその手を差し伸べる彼女の姿が、サージに自己嫌悪を抱かせた。いつしかそれが憧れに変わり、そこから恋情へと育ったのは一瞬のことだったように思う。そばにいてほしいと、初めて自分の中に前向きな願いが宿った。他には何もいらませんが、アムリットだけは諦めたくない。

「水呪」のことだとか、恐ろしい弟王子の存在だとか、問題は山積

している。浅はかな振る舞いで、彼女を散々怒らせてしまってもいい。会いに行っても罵声を浴びせかけられるだけかもしれないが、それでも会いたくて仕方がない。呪禁符の下の、その素顔を見てみたい。隔てるものを何もなくなった目で自分を見て、微笑んでほしい。終わりの見えなかった積年の恋情から一変……新たな恋にとりつかれた彼は、すっかり溺れていた。

「陛下……！」

丁度サージが目線の位置にある書類に手をかけたとき、悲鳴のよくな高い声音とともに誰かが御簾をかき分けて部屋の中に飛び込んできた。常にならない集中力とともに書類は無残に崩れ落ち、少なくとも苛立ちを覚えてサージが目線を上げれば……。

「一大事にございます、陛下！」

そこにいたのはファールランド神殿の神官長マイロだった。眼は血走り、どれだけの距離を駆けてきたものが藍色の法衣は乱れ切っている。

「ああ、そうだな……まるで不意の天津波に遭ったようだとも」

彼を一瞥した後、サージはそう素っ気なく返すと、頭から被るように崩れ落ちてきた書類をかき集め、承認済みと未承認のものを仕分け始めた。立ち止まってマイロを怒鳴りつける時間も、今は惜しい。

どうせ犬猿の仲であるホレストルが出仕していないと聞きつけ、神殿への喜捨がどうのこうのという下らない話を持ち込みに来たのだろう。マイロが神の権威の上に胡坐をかく金権主義の似非神官で

あることは、身につけた不必要な金銀輝石の装飾品の類からも窺い知れる。平和な世に軍事力拡張を推し進める長老議会もそうだが、私腹を肥やすために神の御使いを騙るような神殿組織もそれ以上の頭痛の種だった。だから、極力相手にしたくはない。

「黙らっしやいっ……これは何の嫌がらせですか!」

「……嫌がらせ? 私がお前にか?」

今の状況はどう考えても逆だろうが……そんな風に内心舌打ちながら、サージは彼が自分に突き出すように差し出した右手を見遣る。

「……羽根筆か?」

その手に握られていたのは真白い鳥のそれ。マイロは筆を持つような持ち方をしていたので、そうかと思ったが、根の部分は削られておらず、ついさっき背中から引き抜いてきたような綺麗な状態だった。

見つめているうち、風もないのに羽毛の一本一本がユラユラと毛羽立ち始め、サージは空気に混じり始めた波動に気付く。

「すぐに手を放せ、神官長!」

「はっ……?」

気付いたと同時に発した言葉に、マイロは不可解そうな声を上げる。

間に合わない！

そう悟ったサージは掴んでいた書類を放り出し、左手を前に突き出す。彼の左手の甲からは青い光が放たれ、まるで蛇のように宙を蛇行しながらマイロの手の中の羽根に迫った。

「なっ………！」

彼は驚いて手を引っ込めたが、羽根だけが青く発光する蛇に巻きとられている。締め上げ始めたばかりだというのにサージの額にはじわりと汗が浮かび、その表情は厳しかった。

「陛下っ、これは………」

「黙ってる、気が散る！　そして寄るなっ、間違っても触れるなよ！」

釈明を求めるマイロの口を鋭い叱責で封じながらも、彼は完全に青い光に包まれた羽根を見つめたままだった……しばらくそんな状況が続くものかと思われたが、程なくして光が小さく爆ぜる。火の粉が消えるように光が収まった後には、どこから現れたものか、組紐で束ねられた巻紙が浮かんでいた。

宙を掴むように開いたサージの左掌に、それは引き寄せられるように落ちてくる。彼は躊躇いなく組紐を解き、目の前に巻紙を広げた。

「……漆国アイリスから、聖獣使い殿がいらっしやるそつだ」

そして、書かれた事実を舌に乗せた彼の表情は、もはや恋に溺れる者のそれではなかった。

自分は恵まれている……ヴェンダントに連れてこられてから今日までの間に、アムリットは何度もそのことを実感した。

生まれたときから魔導の力を持つというただ一点だけで、王族でありながら故郷を追われた拳句、本人の意思とは無関係に仮初めの王として祭り上げられ、責務だけを負わされたサージ。

流行り病で夭折した第一位の王太子タリザードの遺児タグラムを守るためだけに第一妃となったのに、汚名を着せられて王宮を追われ、愛する我が子と引き離されたダラシア。

人が羨む最高位の二人には、窮状を支えてくれる者が誰一人としていなかった。

無理矢理連れてこられ、暗殺されかけるわ、情けない失恋国王には誤解された拳句に惚れられるわ……この国に来てからというもの、正直、ろくなことがない。けれど、「水呪」を受けた我が身を愛してくれる家族がいることが幸福だと気付けたのは、今後の人生においてとても有益なことだったと思う。

だからこそ取り戻せっ、フリーダイルのジメジメしてても平穏なナメクジ隠居生活！

こんなゲラ暑くて（いろんな意味で）危険なミノムシ軟禁生活も嫌らーーーーー！

「……というわけで、今日からあんた達はあたしの召使いだから」

決意も新たにアムリットは、目の前で団子のように身を寄せ合う集団に向かって投げかけた。

ここは離宮のアムリットの部屋で、その集団は元第一妃ダラシアの側仕えの少女達……暗殺事件の償いとして長老ホレストルにした要求は、ふたたび貧民街に追いやった彼女達を見つけ出し、自分の身の回りの世話をさせるために寄越せということだった。アムリットがフリーダイルに戻るためには、少女達がどうしても必要だったのだ。

青褪めて震える幼子達の中、中央の一人だけが睨みつけるような強い目をアムリットに向けている。一番の年長者らしいその子はしがみつくと幼子たちの手をギュッと握り締め、毅然とした表情を浮かべていた。それでも顔立ちには十分に幼く、小柄な自分より背も小さい。過酷な貧民街での生活が、少女の内面だけを先に大人にしたのだろう。今は正反対の立場でも、彼女の浮かべる表情はアムリットの幼少期に似通っていた。つまりは可愛げのない子供……どうにもならない人生に絶望し、世の中を恨んでいた頃の自分とそっくりだ。

アムリットは子供が嫌いだ。親戚縁者や、みずからが産んだ子供なら何者にも代えがたく可愛かるうが、赤の他人の子供は別……幼

稚と残酷は紙一重だ。「ナメクジ女」という呼称が生まれたのも、市井の子供達がそう呼び始めたからだ。いつしかその親達も彼らが悪戯をするに「ナメクジ女が来るぞー！」と脅し、叱りつけるようになっていた。

十五年前までフリーダイルでは、年に一回「城開き」という行事を開催していた。それは庶民の子供達に社会勉強として、城内を見学させるという片田舎の小国だからこそ可能な催しだった。もちろん、王族の居住区域や役人達の執務区域は立ち入り禁止で、整えられた美しい庭園だとか舞踏会の開かれる大広間だとかを回るのが、決められた経路だった。「城開き」最後の年、案内係の役人や付き添ってきた代表の父兄が目を通じた隙に、一部の子供達が道を外れて離塔まで入り込んできたことがあった。離塔には見張りの衛兵がいたのだが、その日は「城開き」のために城内の警備も倍になっており、そちらの応援に行くために彼らの勤務時間も一部変更になっていた。その申し送りは不十分で、ほんのわずかな間、見張りが誰もいない時間帯ができてしまった……そして、それは子供達が忍び込んできた時間と不幸な一致をする。

子供は嫌いだ……側に寄れば泣き出すくせに、身を潜めていれば石を投げつけてくる。

「水呪」を受けた王女が城の離れにある塔に住んでいることは、城下の国民達にも周知のことである。壁面いっぱいには呪禁符の貼り付けられた怪しげな塔に行きついた子供達は、当然そこが件の塔だと理解していた。いわゆる悪ガキだった彼らは怖いもの知らずにも塔

を取り囲み、舌つ足らずない甲高い声で「ナメクジ女」と大合唱、投石行為を始めたのだ。中二階の螺旋階段にある窓から、何事かとアムリットが窓から顔を覗かせれば、投げた石の一つが何と顔面に命中。貼り付けていた呪禁符が多少衝撃を和らげてくれたとはいえ、たかが子供の腕力と侮るなかれ、渾身の力でぶつけられた石に目の前には火花が散った。堪らず「あだー！」と悲鳴を上げると、彼女の姿に気付いた当の悪ガキ達は火が付いたように泣き出した……あのとき泣いてよかったのは自分だけだ。

程なくして探しに来た大人達に彼らは見つかって連行されていったのだが、それ以来「城開き」は中止に、離塔にあった窓という窓はすべて漆喰で塗り固められた。「水呪」によって発生した水蒸気は逃げ場を失い、塔内部は常に霧が立ち込めてみるみる苔生していった。二度とこんな騒ぎを起こさないための予防線のひとつとしてアムリットは最上階の一室から出ることをさえ禁じられることになった。監獄よりも劣悪なジメジメとした環境の中で、思い出したくもない長く暗い反抗期が訪れたのだ。

子供は嫌いだ……泣けば許されると自覚して、平気で嘘をつく。

子供達は道に迷って離塔まで来てしまい、そこへ急にアムリットが窓から顔を出したのでびっくりして泣いていたのだと言いついたらしい。彼らが泣き出してからやって来た親や役人達は、アムリットの話の聞かず、彼らの言葉をあっさり信用した。馬鹿馬鹿しくなって、両親にも訴えなかったが、後にその時間に見張りを務めるはずだった衛兵が責任を負わされ、免職となつたらしいという噂を

耳にした……それだけは気の毒だったと思う。アムリットにしてみれば、悪いのは任務に就かなかった彼ではなくて杜撰な連絡体制だ。

子供は嫌いだ……いつだって、「子供」だというだけで皆に庇われる。

少女の瞳の中に当時の自分を見出して、しばし薄暗い追憶に意識を奪われていたところ……

「はわらあー、氣い強えっこワラ娘こだっちらー。ゲラ良いつす、ゲラ良いつす」

傍らからしたバツチャの声に、ハツと我に返る。現実には立ち戻ると、目の前で年長の少女は青褪め、他の子供達は両手で耳を塞いで大層縮こまっていた。呪禁符を身体中に貼りつけた己の姿はいうまでもなく、触覚のように頭から突き出す二つの三つ編み以外はこげ茶色のひだを縫い合わせたような外套に隠れているバツチャも、年端も行かない子供達には「フナムシの化け物」にしか見えないはずだ。同郷のアムリットだからこそ「まあ、すっかりしたお嬢ちゃんね。感心、感心」という微笑まじげな呟きだとわかるものの、デンプオ弁を理解できない者達には薄気味悪いだけでしかなかっただろうし。

「バツチャは呪医……えつとお医者さんかな？　こんな格好してても、あたしもバツチャも人間だから、子供攫って食べたりしない」

老婆のしわがれた声は、まるで魔女が呪文を唱えているように聞こえたのかもしれない……。そう思って、アマリットも酒やけた声を幾分和らげて言った。

今ここにアマリット専属護衛としていつも控えている彼の埃高き下僕の姿が見えないのは、彼女自身が席を外させたからだ。エイダンは逆恨みでアマリットを暗殺しかけた貧民街出身の少女の元同僚であり、かつて軽犯罪に身を染めてきた子供達と二人を残して退室することを、当然渋った……。が、「水呪を甘く見んじゃねえらー」と、水鉄砲を顔に引っ掛けてやったら、真っ赤な顔で「ゲス！」と怒鳴って出ていった。足音は長く続かなかつたので、扉脇の壁裏に控えているらしい。

一時の感情に左右されずに（理不尽でも）与えられた責務を果たそうという気概は、若くして近衛隊長に抜擢されただけのことはある……。どうでもいいけど（アマリット談）。

「とりあえず自己紹介してもらおうか、一番年上そうなあんだから」
アマリットはそうまじない札だらけの手で年長の少女を指名するが、母犬の乳を求めて群がる子犬のような少女達を一身に抱きとめた彼女は、口を開こうとしない。

「……名前わかんないと、あたしは何て呼んだらいいのよ」

それでも、呪禁符をガサガサいわせてため息混じりに諭すと、お

ずおすと口を開いた。どこかこれ見よがしに大きく開かれた口腔から声は発されず、中を覗き込んだアムリットは凍りついた。

舌がない。

みずから噛み切ったり、生まれつきであつたりではない。切り落とされた後、焼きごてをあてられたような傷跡は、いまだ生々しかった。

王宮で起こった醜聞を広めぬための口封じだったのだろうか？

そんな考えが浮かんだが、それもすぐに打ち消した。いくら第一妃の側仕えだったとはいえ、白を追われた貧民街出身の少女達の言いつ分を誰が信用するものか……危険だと思つたら下手な小細工をするよりも処刑するのが一番確実な方法だ。仮にも第二妃を暗殺しかかった少女の身内の者達なのだ、いくらでも後講釈はつけられる。それに、他の子供達は小さく悲鳴を上げたり、嗚咽を漏らしたりしているのだから、舌を切られたのは彼女だけだろう。口封じなら、一人だけというもおかしな話だった。

筋肉馬鹿、石頭に根性なしの勘違いとか、ろくな人間はいないが、出自の高潔さを誇るヴェンダント人が子供相手にこんな陰湿な刑罰を処するとも思えない。わざわざ口封じまでして放り出した人間を連れ戻すことに同意することも考えがたい。アムリットが彼女らを城に連れ戻せと言ったとき、ホレストルは驚いていたものの、後ろ暗い様子は何もなかった。

「……バツチャ、ちよつと診てあげて。他の子供も一緒に」

わずかに逡巡した後、アムリットは彼女にそう依頼した。

「んにゃー。……あつだーなあ、あつだーなあー。すんぐ良いくしだるらー」

バツチャはすぐに同意し、そう言いながら彼女らにピヨコピヨコと近づいていく。フナムシの化け物（と思っているだろう）に迫ってこられて、幼子達は「キヤーキヤー」と悲鳴を上げながら力ギンの御簾がかけられた扉に殺到する……多分、すぐそこにいるエイダンが何とか誘導してくれるだろう。ある意味サージよりも一緒にいる時間が長かった彼は、日頃から「ゲス、ゲス」言わせたり、ちよくちよく地の口調で怒鳴りつけたりしていた甲斐もあってか、バツチャの操るデンボ弁もある程度は聞き取れるようになっていた。

蜘蛛の子を散すように部屋を出ていく幼子達の後に続く年長者の少女は、御簾を潜る前に、一度だけアムリットを振り返った。失った声の代わりを務めるように、その双眸には燻るような暗い怒りが宿っている。心に傷を負った人間の扱いは難しい、それが子供ならなおさら。自分以外の世間一般すべてを敵だと思い込んで誤った強さを身につけ、傷つくまいと心を氷漬けにしている。

自分は随分と厄介なことに首を突っ込んでしまったようだ……でも、今さら放り出すわけにはいかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737t/>

ファーランドの聖女

2011年12月29日12時54分発行